

劔岳地名大辞典

佐伯 邦夫



夕映えの劔岳（大猫山から）

は し が き

『劔岳 点の記』の映画化で、原作者の新田次郎とともに、劔岳はあらためて注目を集めることになった。新田次郎の山岳小説には、他に劔岳を扱った『チンネの裁き』（新潮文庫 他）がある。“チンネ”は劔岳の象徴的な岩場。劔岳というより、日本の——としてもよい。そのチンネをはじめ、劔岳の池ノ谷や東大谷で次々に謎をはらんだ遭難事故を設定。その謎解きが主題の推理小説である。

劔岳の尾根や谷の名称が次々と出てくる。ていねいに読んでいこうとするなら、地図と対照しながら、ということになるだろう。しかし国土地理院の地図にも出てこないものも多い。チンネがすでに地図にない。作品に出てくる劔岳の地名は40を超える。よほどこの山に精通した人でもちゃんと識別するのは無理だろう。混同や誤認もなくはない（小説だからそれでも別にいいのだが——）。それはともかくとして、この際これらの地名について手引きのようなものがあっても無駄ではあるまい、というのが本稿作成の動機のひとつになっている。

実のところ『劔岳 点の記』の時代（明治末期）には、劔岳に関わる地名はほとんどなく、藩政時代と変わらないレベルだったとみてよい。しかし、小説では、現行の地名をばんばん放り込んである。適宜「当時はまだこの名はなかったが——」と断りしつつ。まあその方が読者に対して親切ではあるだろう。

藩政時代のレベルと言ったが、その頃の絵図などを見ると、別山の隣（左）に劔ヶ嶽、あるいは劔峯などとあって、その北に白ハゲ、赤ハゲをつづけている。そのほかの尾根・谷などの地名は一切ない。有名な大窓、小窓を含めて——。したがって今日行われている劔岳の地名は、幾つかを除けば、すべて柴崎芳太郎以後100年の間に生まれたものとみてよい。

地名はいかにして増えていったのか。基本的には新しい登路が開かれるたびにそれを特化する名称が求められた、ということだろう。早月尾根が登られて「早月尾根」、源次郎尾根が登られ「源次郎尾根」というふうにはじめは仮称とか、便宜的に、ということにつけられたものも、たちまち一般化していくというケースが多かった。

かくして本辞典における立項数はおよそ300。その濃密さは江戸市中の大路小路のごとくである。穂高岳・谷川岳に同じような状況を見るが、ほかにはない。どうしてこういうことになったのか。簡単に言えば、それだけ細密な登られ方をしてきたということになるだろう。

その名がどこを指すかを知るには地図がある。それが立体図であればなおいい。それに逆らうようにあえて言語表現をとったが、その担うべき役割とは何になるだろう。それは、語源、由緒、歴史などを明らかにすることであろう。

過去100年なら、必ずしも困難ではあるまい。高校山岳部員の昔から今日まで、100年の半ば以上の歳月を劔岳に関わってきたことになる。時には命名の当事者に混じったこともあった。その立場で、今ならできる、という思いに駆られて、取り急ぎこれを編む。誤脱の修正は後のひとに委ねるとして——

2013年11月

編 者

凡 例

- ※ 本辞典で取り扱う劔岳の範囲は原則として劔沢・立山川・白萩川の流域とし、必要に応じ一部これをはみ出し、また省略した。
- ※ 語の解説はおよそ次の内容、順序にしたがい、適宜前後・増減した。①語義 ②位置・構造（標高）③語源 ④初出または関係資料 ⑤その他
- ※ 距離の表現は、直線・水平を原則とした。標高は、国土地理院の地形図に従い、数字による記載のないものは等高線から読み取り数字の頭に「約」とした。
- ※ 山小屋名は地名同等の意味をもつ場合もあり見出し語に立項。
- ※ 登攀ルート名は地名の一種と言えるが、数が多すぎ（『日本登山大系』・後出・採録のルート数 144）煩雑にわたるので立項しなかった。ただし、主たるものはそれぞれの岩場の解説文の中で、太字で示した。
- ※ **見出し語で網かけ**のものは、国土地理院の現行の地形図に記載があるものを表わす（計 70 項目）。
- ※ 記号 → 指示（を見よ） ☞ 参照（も見よ）
- ※ 出典・参考資料の表示

劔岳に関する主たる総合的文献として次の①～⑧がある。最近の⑧が一番行き届いていて、ここから原典へ遡るガイドもついているので、主としてこれで代表させ、必要に応じて①～⑦もあげた。

- ① 冠松次郎著『劔岳』第一書房（1929）
- ② 高須茂・高瀬具康著『劔岳 登攀ルート図集』築地書館（1956）
- ③ 高須茂・高瀬具康・佐伯邦夫著『新稿劔岳』築地書館（1964）
- ④ ベルニナ山岳会「劔岳登攀年譜」1～7（『岩と雪』57～64・1977～1979）
- ⑤ 細田充著『劔岳の岩場』山と溪谷社（1979）
- ⑥ 白水社『日本登山大系 5 劔岳・黒部・立山』（1981）
- ⑦ 同朋舎出版『日本登山記録大成 卷 7～10』（1983）
- ⑧ 山と溪谷社『日本登山史年表』（2004）

上記①～⑧の文献を、たとえば次のように略表示した。①は（劔岳）、②は（ルート図集）、③は（新稿）、④は、たとえば（年譜 3）、⑤は（岩場）、⑥は（大系）、⑦はたとえば（大成 7）、⑧は（年表）

その他の文献では、単行本、会報などは詳しく、商業雑誌は簡潔に（岳人 39・山小屋 135）などとした。必要に応じページを記した。

山体図：善田優子

あ 行

あかたんおね (赤谷尾根)

赤谷山から南西に伸びる尾根。積雪期の劔岳登山の一コースとされる。1949 (昭 24) 年、早大山岳部が初登破 (大成 9・年表)。赤谷尾根の名称はこの時から。☞赤谷山

あかたんやま (赤谷山)

劔岳北方稜線上、劔岳の北約 4km にある。標高 2260m。山名は西面の赤谷 (ブナクラ谷源流) から。南西へ赤谷尾根をさし延ばす。積雪期、残雪期に、毛勝三山、あるいは当山から劔岳への縦走の途次に登られてきたが、1993 年、ブナクラ谷からブナクラ峠経由で登山道が開かれ、馬場島から日帰り登山の対象となる。藩政時代の絵図に赤倉の名が見えるが、当山との関係は明らかではない。1915 (大 4) 年、木暮理太郎、田部重治らが毛勝山から劔岳へ縦走した時の紀行に出てくる。〈資料〉木暮理太郎「黒部川奥の山旅」(『山の憶ひ出』1938 龍星閣・大成 7)。1960 (昭 35) 年暮れ、劔岳を目指した富山大学山岳部のパーティ 6 名が当山山頂で遭難死した。☞劔岳北方稜線

あかはげ (赤ハゲ)

劔岳北方稜線上、劔岳の北約 3km 地点にある山。標高約 2330m。並び合う「白ハゲ」と合わせて一山体をなす。赤谷山から劔岳への縦走の途次に登られる。藩政時代を含め「赤元」としたものが多いが、ここでは国土地理院の現行地形図の表記に従った。☞白ハゲ

あぞはら (阿曾原)

黒部峡谷下ノ廊下左岸にある段丘状の広場。仙人ダムの下流 1.5km。標高約 850m。温泉が湧出。阿曾原温泉小屋があつて下ノ廊下探勝、劔岳と樺平を結ぶ入下山コース重要拠点となっている。「アゾ」は岩、石のうずたかく積もっているところの意。☞阿曾原温泉小屋

あぞばらおんせんごや (阿曾原温泉小屋)

黒部下ノ廊下左岸阿曾原にある。樺平と劔岳を結ぶコース、下ノ廊下探勝の重要中継点。キャンプ地あり。☞阿曾原

あぞばらとうげ (阿曾原峠)

阿曾原から仙人谷へ抜けるときに越える。標高約 1150m。途中にくどき坂。2007 (平 19) 年、仙人

谷右岸に雲切新道が開削されたことに伴いここを通る登山道は閉鎖された。☞阿曾原 ☞雲切新道

あめりかたいりくせつけい (アメリカ大陸雪渓)

劔沢雪渓上部の劔御前下、劔沢野営管理所の対岸域を指す。由来は形状からだろう。同管理所内の隠語か。〈出典〉谷口凱夫著『アルプス交番勤務を命ず』(1998 山と溪谷社 P.62)

あるふあるんぜ (α ルンゼ) → 劔尾根

いおり (伊折)

西面の山麓、早月川流域最奥の集落。標高約 420m、上市市街から約 14km、馬場島へ約 7km。劔岳の西面からの入山の拠点としての役割を果たしてきた。昭和後期から平成にかけての過疎化で住民がすべて離村、集落としての機能を終えた。☞早月川

いけのたいら (池ノ平)

劔沢北股の源流域、仙人山の南西約 0.5km にある湿原。広さ約 4 ha、標高 1980m。0.5ha ほどの池のほか、池塘が点在する。現行の地形図は平の池としているが、古名は劔池。サンショウウオの生息が知られる。派生的地名として池ノ平山。北側の山稜上に池ノ平小屋がある。仙人池とともに劔岳北面の代表的ビューポイント。☞池ノ平小屋

いけのたいらごや (池ノ平小屋)

池ノ平山から東へ延びる山稜 (黒部市と立山町の境界線) の鞍部 (標高約 2050m) にある宿泊施設。劔岳と樺平を結ぶコースの中継点。大正の初期に稼動したモリブデン鉱山の施設を閉山後 1928 (昭 3) 年山小屋として供用したことはじまる。キャンプ場あり。☞池ノ平

いけのたいらやま (池ノ平山)

劔岳北方稜線上、大窓と小窓の間にあるピーク。標高 2555m。登山ルートは東 1.5km にある池ノ平小屋から尾根伝いにふみ跡をたどる。約 2 時間。山頂が黒部市、上市町、立山町の三つの自治体の要。大正の初め、および第 2 次大戦中、北・東面山腹でモリブデンを採掘する鉱山が稼動。1986～7 年冬、東京芝浦工大水戸巖教授ならびにその二人の子息が謎の遭難死を遂げた。山名は東約 1.5km にある池ノ平から。古名は西仙人山。

北西約 250m に北峰 (2561m) がある^{※注}。☐西
仙人山 ☐池ノ平

※注『コンサイス日本山名辞典』(1978 三省堂)をはじめ、多くの山名辞典では、池ノ平山の標高を北峰のそれととり、2561m としている。『日本登山大系 巻5』(1981 白水社) 挿入図では、北峰を池ノ平山とし当山に「南峰」の名を与えている。

いけのたいらやまほくとうへき (池ノ平山北東壁)

池ノ平山から仙人山へ伸びる尾根の北面中腹(小黒部谷最源流)に展開する岩場。1949年池ノ平小屋を拠点として魚津高校山岳部によって各ルートがくり返し登攀された記録が、同部『山岳部報』1号(1949)にある。また魚津岳友会報『ZINNE』5～6号(1961)にも記録がある。しかしいずれも記録が簡略なため異同の確定が困難である。それ以後の記録が登攀略史とともに『日本登山大系5』にある。

いけのたん (池ノ谷)

早月川上流の白萩川の支流。谷懐に劔尾根を抱き、山体の北西面を形成する。富山平野から仰いだ場合、正面の早月尾根を基準とすると左側半分がそれ。下部は極端な廊下で通行不能。つまり「行けぬ谷」の意を「池ノ谷」とあてられたものと言われる。藩政時代の古図の一部にも「池谷」とある。上部で劔尾根によって二分。右俣は本峰北西面を成す。左俣は三ノ窓に突き上げる。この分岐点が二俣。右俣の支流として劔尾根中央ルンゼ、同 α ルンゼなど、左俣の最上部に池ノ谷ガリーがある。ルンゼ(独)、ガリー(英)とも急な岩溝。1924・5(大正13.4)年富山市の石黒清蔵(日本山岳会)らが初踏破(大成8・年表)。

いけのたんおね (池ノ谷尾根)

劔岳主稜線の長次郎ノ頭の北東約200m付近から池ノ谷左俣上部へ落ち込んでいる。池ノ谷左俣を本流と池ノ谷ガリーとに分ける岩尾根。中間のルンゼを挟む2本の岩稜からなる。この東側(小窓尾根側)のものをL稜、右側(劔尾根側)のそれはR稜。特に後者は充実した登攀ルートとしての内容を備える(ルート図集)。初登攀は1977(昭52)年、荒木鷹志他。

いけのたんおね (池ノ谷尾根)

前項とは別に昭和初期、現在の劔尾根がこの名でよばれ、一部では1950年頃まで使われた。〈初

出〉中野正英「池ノ谷の印象」(『山岳』25年1号-1929・大成)「頂上の左肩より派出されている岩稜は……以下この岩稜を仮に池ノ谷尾根と呼び……」。☐劔尾根

いけのたんかぶろうか (池ノ谷下部廊下)

池ノ谷は入口から約1.5kmにわたり兩岸の切り立ったゴルジュ(仏=廊下)の中に大小の滝が連続する通行不能帯をなす。これが池ノ谷下部廊下。池ノ谷は「行けん谷」の意とされる所以。1961(昭36)年大阪府立大パーティによって初踏破された。岩登りの技術を尽くした激しい登攀になる。昭和の初めの一部の記録ではこの区間を五枚滝と呼んでいる。また池ノ谷ゴルジュともいわれる。滝の名は(下から)入口ノ滝、奥ノ滝、赤岩ノ滝、終リノ滝(大系5)。☐池ノ谷

いけのたんがリー (池ノ谷ガリー)

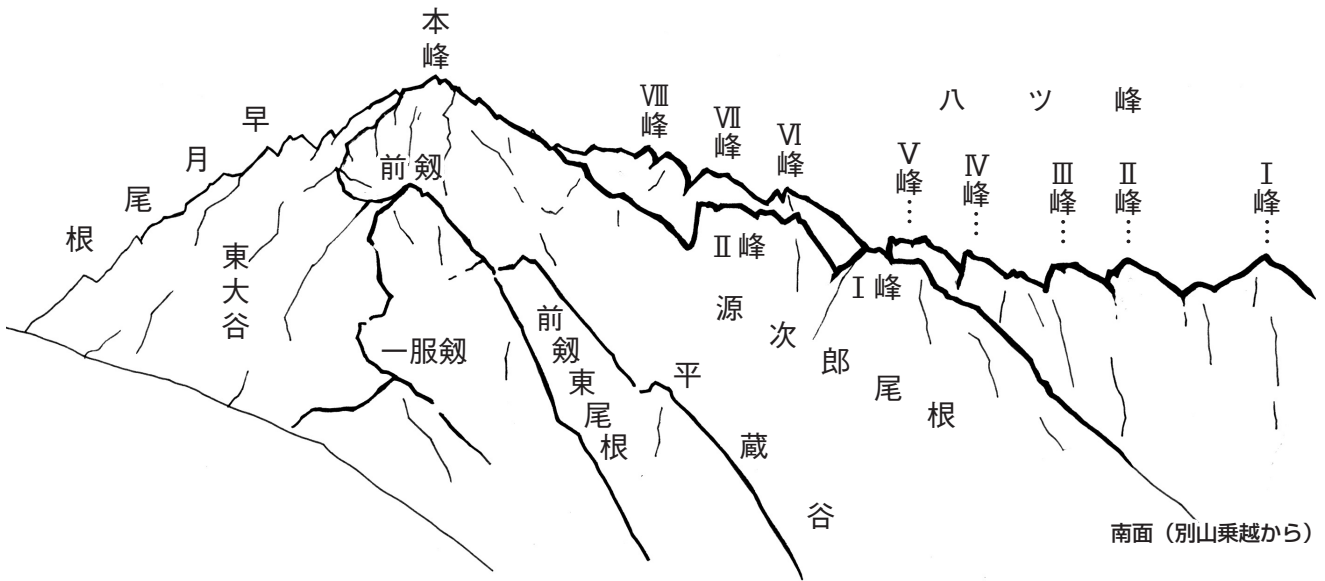
池ノ谷左俣最源流。三ノ窓の西脇から池ノ谷乗越までの約0.4kmの区間を指す。主稜縦走のコースの一部。全体が大規模なガレの斜面。ガリー(英=岩溝)と呼ぶには必ずしも適切ではないのだが、和語の「ガレ」、語感が合わさって定着。1960年前後からの名。2011(平23)年2月訓練中の富山県警山岳警備隊員3名が新雪表層雪崩に遭い丸山政寿隊員が犠牲になった。☐池ノ谷乗越

いけのたんのっこし (池ノ谷乗越)

長次郎谷右俣が突き上げる主稜線上のギャップ。標高約2850m。反対側が池ノ谷ガリー。東面と西面、あるいは三ノ窓方面を結ぶ交通の要衝。昭和の初～中期、この名称が確立する過程で、三ノ窓乗越(大成8 P.238)、あるいは熊ノ岩沢乗越(大成9 P.191)、熊ノ岩乗越(大成10 P.65)などとも言われた。また吉沢一郎著『登高記』(1930 古今書院)では長次郎谷東窓と長次郎右俣窓を混用している。

いけのたんひだりまた (池ノ谷左俣)

池ノ谷の源流の一つ。二俣から一直線に三ノ窓に突き上げる。小窓尾根と劔尾根の間を穿つ深い廊下。夏は雪渓。白萩川と三ノ窓方面を結ぶ入下山路とされる。最源流に池ノ谷ガリー。1924(大13)年石黒清蔵(既出)がガイド佐伯八郎とともに初下降した(年表)。☐池ノ谷・池ノ谷ガリー



いけのたんみぎまた (池ノ谷右俣)

池ノ谷の源流の一つ。二俣で左俣をわける。劔尾根、本峰西面および早月尾根上部に囲まれた範囲が流域。代表的岩場に劔尾根、池ノ谷右俣奥壁、支流に中央ルンゼがある。石黒清蔵(既出)らが1925(大14)年に初登攀(年表)。☐池ノ谷いけのたんみぎまたおくかべ(池ノ谷右俣奥壁)→劔尾根

いけのたんみぎまたまくいわ(池ノ谷右俣幕岩)→早月尾根

いっぶくつるぎ(一服劔)→別山尾根

いんであんくーろあーる(インデアンクローアル) 平蔵谷から源次郎尾根最上部取り付くルート。文部省(当時)登山研修所の所員がインド人を案内したルートとして、部内で使われていたものが流出。後にこれが佐伯源次郎(本名源之助)の、同尾根命名のいわれとなった登山と同ルートであることが判明(大成8・岳人630)。クローアル(仏)は英語のガリーに同じ。☐大脱走ルンゼ

うらつるぎ(裏劔)

劔岳西面、北面を指す。最初に開けた別山側からすると裏側にあたることからの名。公正さを欠くとして昭和の後半の一時期使われなかったが、平成になって主として写真家のあいだから復活のきざし。

えすじせっけい(S字雪渓)

平蔵雪渓の支流。源次郎尾根の南面側壁へ食い

込む。2峰平蔵谷側フェースへのアプローチとされる。クレヴァス(仏=雪の割れ目)が出ると通行が困難になる。

えぼしいわ(烏帽子岩)→早月尾根

おうかん(王冠)→早月尾根

おおぞれだいら(大ゾレ平)

立山川上流にあった平。毛勝谷出合と東大谷出合いの間の右岸川岸。明治期硫黄の精製所があった。「ゾレ」は崖の崩れ落ちたところ。〈出典〉小笠原勇八著『立山・劔岳』(1939三省堂)。

☐立山川

おおまど(大窓)

劔岳北方稜線上の鞍部。大きな切れ込みは富山平野からもよく見える。白萩谷から小黒部谷、あるいは池ノ平方面へ行くときに越える峠。2180m。白萩川を遡行、源流で中の又に入る。馬場島から6~7時間。`窓、は切れ込みの深い鞍部のこと。南側へ「小窓」「三ノ窓」が続く。☐白萩川

おおまどせっけい(大窓雪渓)

大窓谷の雪渓。池ノ平の鉦山が稼働していた頃(大正初期)大窓と鉦山を結ぶ通路として登降された。☐大窓 ☐大窓谷

おおまどだん(大窓谷)

小黒部谷の一流。大窓に突き上げる。白萩谷から小黒部谷、劔沢方面への重要な経路とされた。☐大窓 ☐大窓雪渓

おまどのずこ (大窓ノ頭)

劔岳北方稜線上のピーク。大窓から南へ約0.5km。急坂を登りきったところ。標高約2500m。山頂は劔岳北面の景観に優れる。現在の池ノ平山にこの名をあてた文献も大正、昭和前期にあった。☐大窓 ☐池ノ平山

おまどのずこせりょう (大窓ノ頭西稜)

大窓ノ頭から北西に伸びる尾根。白萩川源流を西仙人谷と中仙人谷に分ける。標高差は1000m。尾根筋は平凡だが、西面(西仙人谷側)は深い

ルンゼと鋭い岩稜を発達させている。

おくかべ (奥壁) →劔尾根

おくのすわり (奥のスワリ)

立山川にある狭窄部の名。東大谷の出合いの約0.8km上流辺り。右岸に高巻き道があったが今は廃道。「スワリ」は土地のことばでゴルジュ(仏=廊下)の意。下流にあるゴルジュに対応する地名と思われる。☐立山川

おだまきるんぜ (オダマキルンゼ) →東大谷

か 行

かがみだん (カガミ谷)

立山川の最源流。奥大日岳の東面をなす。「カカミ」は北向きの湾曲した斜面を指すとされる。〈参考〉菊池俊朗著『白馬岳の百年』(2005 山と溪谷社 P.34) ☐立山川

かにのはさみ (蟹の鉋) →早月尾根

かにのよこばい (蟹の横這い) →別山尾根

かにのたてばい (蟹のタテ這い) →別山尾根

かみなりいわ (雷岩)

白萩川の谷底にある二階建ての家ほどの巨石。池ノ谷出合の上流約0.5km、標高約1170m地点にあり、小窓尾根の取り付点の目印になっている。1923(大12)年、画家・登山家の吉田博が遡行中雷に会いこの岩の下に避難、絵筆で「雷岩」と記したことからこの名。〈出典〉小笠原勇八著『立山・劔岳』(既出)。「雷岩屋」とも言われる。

かみなりいわや (雷岩屋) →雷岩

〈参考〉「雷岩は二つの大きな岩塊が合わさって岩小舎をつくっており……良き野営場であろう」織内信彦「劔岳西面紀行」(『偃松帯』1941 朋文堂・大成9)。ただし今日は構造が変わって雷岩に岩屋としての機能はない。

がندوقおね (ガندوق尾根)

南仙人山から東へ、黒部下ノ廊下左岸に達する尾根。ガندوقは大型の鋸。尾根の鋸歯状の様を表す。劔沢を挟んで対岸にトサカ尾根があるのも同じ。

きくいし (菊石)

立山川の標高約890m地点の谷底にある巨石。

古図には「虎石」並べて描かれるが、現在、虎石は不明。☐立山川

きたせんにんおね (北仙人尾根)

仙人山から北へ延びる、黒部谷と仙人谷の間の尾根。北仙人山、坊主山を経て黒部谷出合いに達する。昭和の初期ここに尾根道が開かれていたが廃道。〈資料〉「北仙人山を経て池の平に通ずる切開け道が去年(昭和三年)の夏に拓かれた」(劔岳)。今日は積雪期の劔岳登山の難コースのひとつとされる。初踏破は1951(昭26)年、法政大学パーティによる(年表)。

きたせんにんやま (北仙人山)

黒部の谷懐にそびえる孤峰。黒部川支流の黒部谷と仙人谷を分ける山稜(北仙人尾根)の主峰。標高2199.1m。国土地理院の現行の地形図では、当山を**坊主山**としているが誤り^{※注}。山頂に三等三角点を置く。昭和の初期には登山道があったが廃道、登山は積雪期に限られる。山頂からは黒部両岸の山への展望に勝れる。仙人岩屋、仙人温泉を基準にして北方に当たることからこの名。☐北仙人尾根

※注 昭和初期の文献では、坊主山は当山の北約3kmにある1667.9m峰としている。これから当山を含む北仙人尾根は別名坊主尾根とも言われた。このことから生じた混同かと思われる。

きたまた (北股)

劔沢の支流。三ノ窓谷、小窓谷を指す。本流は南股。合流点が二股で左岸に近藤岩がある。命名は吉沢庄作か。同氏の「黒部方面より劔岳を

経て立山に至る記」(『山岳』23年1号・大成7)に「我等はこの小窓より打ち続ける一帯の大雪渓を劔沢の北又と呼んだのである」とある。☐劔沢 ☐三ノ窓谷 ☐小窓谷

きわだいら (木和平) → 早月尾根

きわだわら (黄蘗原?)

白萩川のブナクラ谷出合い対岸付近を言うようだがはっきりしない。黄蘗はミカン科の落葉高木。〈出典〉「白萩川池ノ谷廻行記」長谷川孝一『山岳』23年1号(大成8) ☐キワダワラ谷

きわだわらだん (キワダワラ谷)

白萩川の支流。ブナクラ谷出合対岸の約0.5km上流地点あたりから早月尾根に突き上げる急な谷。1917(大.6)年冠松次郎による初登破のときをはじめ、初期の早月尾根の取り付きルートとされた。略してキワラ谷ともいわれる。

きわらだん (キワラ谷)

キワダワラ谷が縮まった名称とされる。☐キワダワラ谷

くちのたん (口ノ谷) → ハッ峰

くどきざか (クドキ坂)

黒部下ノ廊下の阿曾原から阿曾原峠へ登る時の単調な急登。

くまのいわ (熊ノ岩) → 長次郎谷

くもぎりしんどう (雲切新道)

黒部下ノ廊下左岸、雲切尾根に刻まれた登山道。仙人温泉と黒部阿曾原を結ぶ登山コース。2006(平成18年)年に開設。これに伴い仙人谷左岸の従来のルートは閉鎖された。旧コースよりも所要時間が約1時間余計にかかる。

くらのすけだいら (内蔵助平)

黒部川支流の内蔵助谷の谷懐にひろがる盆地状の平ら。丸山、黒部別山などの山々が取囲む。広さ約10hr、標高1700～1750m。黒部ダムから劔岳東面への入山路の中継点。黒部ダムから、ハシゴ谷乗越を経て真砂沢ロッジまでいずれも3～4時間、約半日の行程である。古い地名。ここが富山城主佐々内蔵助成政のアルプス越えのルートだったという一説にちなむ。

くれおぼとらにーどる (クレオパトラニードル) → ハッ峰

くろゆりのこる (黒百合のコル) → 別山尾根

くろべべっさん (黒部別山)

劔沢と黒部本流との間にある山。中央、南北の三

つの峰からなる。標高2353m(中央)。東面は黒部下ノ廊下に切れ落ちている。山頂は劔岳東面の絶好の眺望地。後立山を越え黒部峡谷下ノ廊下を横断、当山を経て劔岳のハッ峰各ルートへ登り次ぐのが国内での冬季登攀の最難コースとされる。

ぐんたいつるぎ (軍隊劔)

前劔の別称。略してぐんけん(軍劔)とも。大正の末、二人の陸軍将校が霧の中前劔に登って本峰と誤認、半分の時間で登頂したと吹聴したことからこの名。芦峠寺のガイド衆から出たとされる。現在はほとんど使われない。☐前劔

けかちだん (毛勝谷)

東大谷と並んで山体の西面を形成する谷。立山川の支流の一つ。早月尾根2600メートル峰を源頭とする。支流にサビ谷があり、本流は上部で右俣、左俣にわかれる。1906年(柴崎芳太郎らの登頂の前年)佐伯仁助、志村徳助がこの谷より劔岳に登ったとされるが真偽、詳細、は不明(大成7)。1956(昭.31)年9月、魚津岳友会による登攀が確かな記録とされる。〈記録〉魚津岳友会「劔岳西面毛勝谷廻行」(岳人124・年表)。劔岳北方稜線の毛勝山に同名の谷があり混同に注意。`ケカチ、は新潟県頸城地方のことばで万年雪の堆積するところの意。内部の名称はサビ谷を除いてすべて魚津岳友会が命名。右俣・左俣、第一尾根……、ドーム等々、通例になったものになっている。

みぎまた (右俣)

東大谷との境界の尾根に突き上げる。流域の中に第一尾根があり、左岸の左俣との境界尾根が第二尾根。前項の1956年、魚津岳友会パーティは右俣に入り途中から第二尾根を登って早月尾根に出ている。第二尾根の末端が右俣へ切れ落ちるところが衝立壁。脆い雑多な絶壁。1961年関西学院大による記録がある(大系5)。

ひだりまた (左俣)

毛勝谷の本流。深いワレ谷が早月尾根の標高2500m地点へ突き上がっている。初登攀は1959年魚津岳友会パーティ。左岸、サビ谷との境界尾根が第三尾根。この初登攀は1963年、大阪府立大パーティによる。左俣右岸に接する第三尾根側壁にひときわ目立

つ壁があり右岸岩壁などとされる。1959年魚津岳友会パーティによる記録がある(大系5)。

さびだん (サビ谷)

毛勝谷の支流。左俣本谷北側にあつてこれと並行して早月尾根 2470m 地点に突き上げる。左俣本流と同じようなきびしいワレ谷。古い地名。毛勝山塊の大明神山にある「サブ谷」も同じと思われるが語義不詳。初登攀は1963年、大阪府立大パーティ(大系5)。

けつわりだき (ケツワリ滝)

仙人谷源流部のケツワリ坂の途中にある滝。登山道は右岸に。残雪に隠れて見えない場合も多い。

けつわりざか (ケツワリ坂)

仙人谷源流部の急坂。`けつわる、(尻割る)は越中の方言で投げ出すことをいう。

げんざんそう (剣山荘)

別山尾根の黒百合のコル東側直下約0.3kmにある山小屋。標高約2475m。1953(昭和28)年創建。南東面の山小屋のうち山頂に最も近い。キャンプ可。

げんじろうおね (源次郎尾根)

山頂から南東側へ張り出し剣沢左岸に達する岩尾根。ハツ峰とともに剣岳東面を構成する中心的岩場。一、二峰の二つの峰からなる。主稜線の初登攀は1925(大14)年7月、第三高校(現京都大、以下同じ)渡辺漸、今西錦司、佐伯政吉(ガイド・芦畷寺)。長次郎谷、平蔵谷に次ぐ人名からとった名称。芦畷寺の源次郎(本名佐伯源之助。源次郎は屋号=通称)が1924(大13)年剣沢小屋建設にあつたときに、平蔵谷からこの尾根の上部に取り付き頂上に出たことからこの名。当初からもっとふさわしい名称をという声があつたがたちまちにして定着した。当初から「源次郎尾根」「源次郎尾根」と両用に表記されてきたが、近年「源次郎尾根」に固まりつつある。〈典拠〉渡辺漸「剣岳新登路とハツ峰」-『山岳』21年1号(大系8)。☞インデアンクーロアール

平蔵谷側

いっぽうへいぞうがわ (一峰平蔵側)

ダイヤモンド形の巨大な絶壁を別山乗越方面へ見せている。下部中央に顕著なルンゼ(中央ルンゼ)があつて、それが中程からは

左上へ走るバンドに変わる。このバンド(中央バンド)をもって下部フェースと上部フェースに分けている。下部フェースの主な登攀ルートに中央ルンゼルート(1955魚津高校)その右に中谷ルート(1967中谷三次他)がある。上部フェースには名古屋大ルート(1955名古屋大)、成城大ルート(1959成城大)弓形クラックルート(1955魚津高校)などがある。いずれも難度の高い充実のルートとされる(大系5)。

にほうへいぞうがわふえーす (二峰平蔵側フェース)

一峰のフェースに比べて小さく難度も低い。主稜縦走の途次に登られることが多い。遠目(たとえば前剣頂上などから)ではスッペリとした一枚の壁のように見えるが、西から順にA~Dフェースに分けている。難度・スケールともこの順に上がってくる。初登攀は1926(大15)年第三高校、ルートは今日のBフェースカントルートあたりと思われる(大成8・大系5)。カンテ(独=直立した稜角)。

長次郎谷側

いっぽうちょうじろうだんがわ (一峰長次郎谷側)

スケールは大きい藪が多く登る人はいない。ルートに中央ガリールート(1950剣稜会)および成城大ルート(1959成城大)がある(大系5)。

にほうちょうじろうだんがわ (二峰長次郎谷側)

尾根の北面にあたり暗い壁で登る人は少ない。初登攀は1949剣稜会藤平彬文他(大系5)。

こくろべだん (小黑部谷)

黒部川の四大支流のひとつ。櫛平の下流約1kmで本流と分岐し剣岳北方稜線と北仙人尾根の間を流れ池ノ平山東面で終わる。大正期には谷沿いに道が開かれていて池ノ平山東面の鉦山に通じていた。また藩政時代の古図にも朱線が描かれており、黒部下ノ廊下のバイパスの役割を果たしていた。

こまくさるんぜ (駒草ルンゼ) →東大谷

こまど (小窓)

剣岳北方稜線上の鞍部。白萩谷から西仙人谷を

経て小窓谷（劔沢）方面へ行くときに越える峠。標高約 2340m。`窓、は、劔岳では両側の切り立った鞍部をあらわす。後立山のキレットに相当。隣り合って北に「大窓」、南に「三ノ窓」がある。派生的地名に小窓尾根・小窓谷・小窓ノ頭・小窓ノ王などがある。

こまどおね（小窓尾根）

本峰の北東約 1km にある小窓ノ王を頂点として北西に延びる尾根。白萩川を本流とその支流の池ノ谷に分けている。急峻な岩峰を連ね富山平野から見たときの山容形成に重要な役割を担っている。早月尾根とともに冬季の代表的コースとされる。初踏破は 1930（昭 5）年 6 月、同志社大の児島勘次らによる。名称の確立はこの登攀が契機か。それ以前は小窓西尾根などとも言われた（大成 8 P.307）。

主稜線（下から順）

せんろっぴやく（1600）

早月尾根の 2600 と同様、標高がそのまま地名化した。標高 1614m。最初に尾根がやや平坦になるところ。池ノ谷への下降地点。このことから池ノ谷乗越と言われることもあるが、主稜線と同じ地名があつて紛らわしい。小窓尾根乗越という場合もある（大成 9 P.136）。山道はここまで。この先は野生の中へ突入となる。

にーどる（ニードル）

主稜線上に突き立つ岩搭。標高約 2320m。通過の際は付け根部分の池ノ谷側を巻く。1930 年初登攀時からの名（大成 9）。

どーむ（ドーム）

主稜線上にあるピーク。ニードルとピラミッド（状）ピークの間に位置す。標高約 2400m。マッチ箱ピークと同様魚津高校の命名か。

ぴらみっど（じょう）ぴーく（ピラミッド（状）ピーク）

主稜線上にある小突起。ドームとマッチ箱ピークの間に位置す。標高約 2450m。

まっちばこ（の）ぴーく（マッチ箱（の）ピーク）

主稜線上部にあるピーク。標高約 2650m。本来 0.2km 程の頂稜全体を呼んだものだったが、南東端に 2650m の標高点が置か

れると、反対の北西端のピーク（約 2610m）のみをこの名称とする資料が現れ（『日本登山大系』など）、これに倣うものも目立つようになった。ここへの登りが小窓尾根登攀のヤマ場とされる。馬場島や早月尾根から見ると頂稜が平たく箱形を呈するところからの名。1950 年頃魚津高校によって呼ばれ始めた。すでに有名だった北岳バットレスに倣ったもの。

こまどのずこ（小窓ノ頭）

小窓尾根最上部の峰。マッチ箱ピークと小窓ノ王の中間、小窓から登って稜線に出たところにあることからの呼称。1915（大 4）年、木暮理太郎、田部重治らが毛勝山から劔岳へ縦走の途次、赤谷山頂上から劔岳北面を遠望してこの名を選ぶ。〈出典〉木暮理太郎「黒部川奥の山旅」- 木暮理太郎著『山の憶ひ出』（既出）。

こまどのおう（小窓ノ王）

頂上から北北東約 1 km にある鋭峰。小窓尾根の頂点になる。標高約 2760m。南側が垂直に切れ落ちてチンネ北面と向き合い、三ノ窓の鋭い切れ込みを形成する。小窓ノ頭の名がすでにこの 0.4km 手前のピークに与えられていたので、「頭」よりもさらに上位の概念として「王」が選ばれたものか。名称にふさわしい威厳のピーク。この名が確立される以前は小窓ノ頭とされていた。冠松次郎は「劔岳を遠望したとき最も観者の眼をそそるのは、小窓の頭の牙岩……」としている（劔岳）。〈初出〉吉澤一郎『登山記』（既出）。これに対して小窓の西数十メートルにある岩塊を小窓妃と呼んでいる。☐小窓妃

こまどのおうなんぺき（小窓ノ王南壁）

小窓ノ王の頂上から池ノ谷左俣へ切れ落ちる垂壁。登攀ルートに京都山岳会ルート（1961）・ダイレクトルート（1962 福岡大）がある（大系）。

こまどのおうにしかべ（小窓ノ王西壁）

小窓尾根を登り詰め最後に行き止まりのように突き立つ絶壁。初登攀は 1949 年関西学院山岳部（登攀者不詳 - 岳人 40）。

北側（白萩川側）側壁**こまどひ（小窓妃）**

小窓の西側数 10m に突き立つ岩塊。1965 年魚津岳友会・直登会合同登山の際に命名された。小窓尾根の頂点に小窓ノ王があるのを踏まえている。☐小窓ノ王

ほくりょう（北稜）

小窓尾根マッチ箱ピークの 2650m 峰から弓なりの弧を描いて北へ落ち込む稜。小窓尾根側壁で最初に登られたルート。途中顕著なスラブ小窓スラブを登る。スラブ（英＝平滑な一枚岩）。上半はハイマツの尾根。初登攀は 1960 年、直登会大野明他（年表）。通常は「〇〇北稜」とされるところだが、単に北稜なのは地名として分かりにくい。

だいいちるんぜ（第一ルンゼ）

北稜に並行するようにしてマッチ箱ピークに突き上げる西仙人谷支流。最も小窓に近いことから第一とされる。これを基準に西側へ第二ルンゼ……第五ルンゼが決められた。また、このさらに小窓寄りの小さなルンゼが 0（ゼロ）ルンゼとされる。中間部にあるオーバーハング（英＝庇状に張り出した岩）の涸滝が山場。初登攀は 1960 年、直登会大野明他（岳人 161・大系 5）。

だいにるんぜ（第二ルンゼ）

マッチ箱ピーク北西の肩状のところへ突き上げる。暗いチムニー（英＝煙突状の狭い割れ目）が連続する。初登攀は 1965 年、魚津岳友会・直登会合同パーティ（岳人 209）。

だいやもんどすらぶ（ダイヤモンドスラブ）

第二ルンゼ上部右岸にある菱形のスラブ。ブッシュ、草付きの多い一帯にあって目立つ存在。第二ルンゼの途中から左に分かれて取り付く。初登攀は 1971 年、魚津岳友会・直登会合同パーティ（大系）。

だいさんるんぜ（第三ルンゼ）

マッチ箱ピーク北西の肩状のところへ突き上げる。ガレ、草付きの多い浅いルンゼ。上部はブッシュ帯。初登攀は 1965 年、魚津岳友会・直登会パーティ（岳人 235）。

だいやんるんぜ（第四ルンゼ）

一連のルンゼの中で最も豪快なもの。登攀内容も濃い。下部は雪崩に磨かれたスラブ。中間に大緩傾斜帯を持つ。ドームとマッチ箱の間のコルへ突き上げる。初登攀は 1964 年、魚津岳友会・直登会パーティ（年表）。

だいがるんぜ（第五ルンゼ）

水流のある比較的緩やかな谷。途中で Y 形に分岐、その左はニードルに達す。小窓尾根の稜線と西仙人谷を結ぶ連絡路として通られる。

かぶがんぺき（下部岸壁）

西仙人谷を出合いから 0.3km ほど入り、入口のゴルジュを抜けたあたりの右へ、雪崩に磨かれた壁状のルンゼが落ち込んでいる。これが下部岸壁。1975 年登攀倶楽部大柳典生他によって登攀された（大系）。

西側（池ノ谷側）側壁**あーるわん（R 1）～あーるえいと（R 8）**

側壁に並び合って刻まれた溝。それに上から順に番号を付けたもの。対岸の剣尾根のそれとの混同を避ける意味でローマ数字が当てられたのだが『日本登山大系』でアラビア数字に改められた。ここでは後者でいく。以下主たるものを略述。高距離 300～500m。

R 1 - 位置は剣尾根 R 4 の対岸あたり。途中に雪渓。R 2 - 小窓ノ頭西面に突き上げる。R 3 - 小窓ノ頭とマッチ箱ピークの鞍部に突き上げる。1955 年名古屋山岳会による登攀記録がある（同会会報 90-1957）。R 4・R 5 - 並び合ってマッチ箱ピークの上に突き上げる。R 6・R 7 - デルタフェイス（次項）を隔ててマッチ箱ピーク頂上にくい込む。R 8 - 出合いは二俣の上流約 0.2km 地点。複雑に分岐、流域がマッチ箱中腹からドームまで扇形に広がっている。解明はこれから。次のルンゼはニードル沢とも言われ、水流のある谷。尾根上のニードルあたりと池ノ谷との連絡路とされる。

※ ルンゼ以外の主な登攀ルート

ルンゼとルンゼの間はそれぞれ稜となっているのだが、あまりに特殊な存在なので『日本登山大系』からその名称のみを列挙する

にとどめる。上から、小窓ノ王左下フェイス、台形状岸壁、スラブ状フェイス、2650m 池ノ谷側フランケ、さらに次項のデルタフェイスがある。

でるたふえいす (デルタフェイス)

マッチ箱中腹下半部に広がる豪快かつ威圧的スラブ。池ノ谷左俣を通るもの目を奪う。正面と右側面の二面からなる。ここでは劔岳の岩場にふさわしい登攀合戦が展開された。初登攀は1967年ベルニナ山岳会岸本光弘他(大系5)。この他登攀倶楽部ルート(1968)清水RCCルート(1970)がある(以上年表)。なおこの壁の名称についてコンマシイフェイスが提案されたが(新稿)支持されなかった。

こまどせつけい (小窓雪渓)

小窓谷を覆う万年雪。その芯の氷体が2012年日本雪氷学会によって、三ノ窓雪渓、立山東面の

御前谷雪渓とともに現存する氷河の一種と認定された。

こまどだん (小窓谷)

劔沢北股の源流のひとつ。源頭の小窓を介して白萩谷から劔沢へ通うルートとされた。☐小窓雪渓 ☐小窓

ごろくのこる (5.6のころ) →ハッ峰

こんどういわ (近藤岩)

劔沢の北股出合左岸にある大岩。内部が空洞で、泊まり場としても利用されることから近藤岩屋とも言われる。日本山岳会の近藤茂吉(吉田孫四郎らに次ぐ劔岳の登頂者)に因む。〈資料〉高橋健治「劔岳東面」(『三高部報』第6号・大成8)「劔沢へ下ると劔沢の真ん中に大岩が立っている。往年近藤茂吉氏が劔沢を黒部へ下ろうとして達せず帰っていったとき以来この岩は近藤岩と命名された」(命名の主語?)。初期の文献ではこれを劔沢の岩屋としている(劔岳)。

さ 行

さびだん (サビ谷) →毛勝谷

さんのまど (三ノ窓)

劔岳北方稜線上の鞍部。劔岳西面の白萩谷(池ノ谷)から東面の劔沢(三ノ窓谷)方面へ行くときに越える峠。2650m。隣り合って北に小窓、大窓。「三」は、大窓、小窓に次ぐ「第三、という意味。チンネ、劔尾根などの登攀に際し根拠地とされる。命名は佐々木助七か。吉沢庄作の「黒部方面より劔岳を経て立山に至る記」(『山岳』23年1号)に「これこそ助七の所謂「劔の三窓、に連なる……」とある。

さんのまどいわや (三ノ窓岩屋)

三ノ窓の切れ込みの底にある。3~4人が宿泊できる広さ。チンネの開拓期に使用された。〈初出〉齊藤新一郎「劔ヶ岳尾根縦走記録(大正六年度)」(1917年の記録『登山行』1年)「三窓付近は殆ど平地なし。たゞし雨天の時は三窓の最低部に岩室式のものあり。但し最大収容人数三人なり。(中略)故に、天幕を持ちゆくべからず。」

☐三ノ窓

さんのまどおね (三ノ窓尾根)

劔沢北股の三ノ窓谷と小窓谷の間の尾根。

さんのまどせつけい (三ノ窓雪渓)

三ノ窓谷を覆う万年雪。その芯の氷体は数十メートル厚さを有し、2012年日本雪氷学会によって小窓雪渓、立山東面の御前谷雪渓のそれとともに本邦に現存する氷河と認定された。☐三ノ窓谷

さんのまどだに (三ノ窓谷)

劔沢北股の源流のひとつ。二股から三ノ窓へ一直線に突き上げる万年雪の堆積する谷。ハッ峰北面へ急峻な支流を何本も食い込ませる。劔沢と三ノ窓を結ぶ経路として通られる。☐三ノ窓雪渓

さんのまどのずこ (三ノ窓の頭)

ハッ峰の頭とチンネの間的小突起。その意味にふさわしい存在感がない。2万5千分の1地形図では表現しきれずハッ峰の頭に吸収されてしまうほど。クレオパトラニードルはこのピークから派生。かつて(チンネがチンネの名のもとに取り扱われる以前)は、池ノ谷乗越の北側のピーク(=現ハッ峰の頭)や現在のチンネがこの名で呼ばれた。

さんのまどのっこし (三ノ窓乗越) →池ノ谷乗越

さんぼんやり (三本槍) →東大谷

さんぼんやりるんぜ (三本槍ルンゼ) →東大谷

しかのはな (シカの花)

大窓の西面(白萩川源流中ノ俣上部)に現れる雪形。葬式の祭壇に飾るシカ花に似るところから。

☐大窓

jee-suri-doo-mu (G3ドーム) →東大谷

ししがしら (獅子頭) →早月尾根

しただき (舌滝) →東大谷

じゃんだるむ (ジャンダルム)

チンネの前面に突き立つ二枚の三角形のスラブ。小窓ノ王と向き合い三ノ窓の切れ込み南側の壁を構成する。チンネ登攀の足慣らしのようにして登られる。ジャンダルムは仏語で衛兵、山では前衛峰の意味で使われる。すでに有名な奥穂高岳のそれにならって、1949(昭24)年、魚津高校山岳部、日本山嶺倶楽部などによって命名された※注1。旧称マイナーチンネ、マイナーピーク ※注2。

※注1 荒地勇「チンネ・ジャンダルム」(魚津高校『山岳部報』2号-1950)「チンネのジャンダルムとして昨年日本山嶺クラブの人達と我々のグループによって命名された……」。また日本山嶺倶楽部「劔岳三ノ窓周辺」(岳人20-1949)には「このあたりのパイオニア高橋健治、今西錦司、(京大山岳部)の呼称と富山高校山岳部、魚津高校山岳部の人々の意見をまとめて図のような名称を……」ともある。

※注2 チンネの開拓期(1935年前後)の地名。その後の太平洋戦争による断絶・混乱で戦後に継承されなかつ

た。こうした例は2~3にとどまらない。

しらはぎおね (白萩尾根)

白萩山から南西に延びて白萩川に達する。中間部から上部にかけて充実した岩尾根。1963年5月神戸FRC※注の元井芳正らが登攀(年表)。

※注 ファミリーレクリエーションクラブ

しらはぎがわ (白萩川)

劔岳北西面を流域とする谷。馬場島で立山川と合流早月川となる。支流にブナクラ谷、池ノ谷がある。源流にある山名、白兀(しらはげ)に佳字をあてたものと思われる。藩政時代からの名。

しらはぎやま (白萩山)

劔岳北方稜線上、赤ハゲと赤谷山の中間のピーク。標高2269m。1915(大4)年、木暮理太郎、田部重治らが毛勝山から劔岳へ縦走の途次当山に登り、その時に命名。〈出典〉木暮理太郎「黒部川奥の山旅」(既出)。

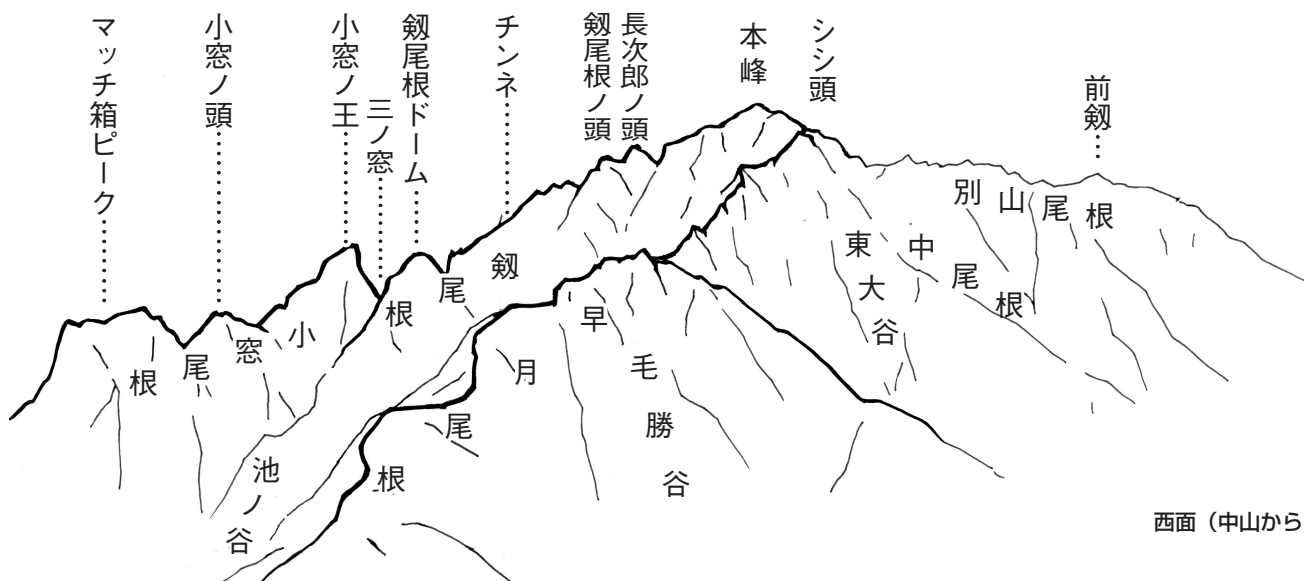
しらはげ (白ハゲ)

劔岳北方稜線上のピーク。大窓の北約0.5kmにある。標高2387.5m。山頂に二等三角点。大窓から北へハイマツを分けると約1時間で達する。劔岳北面の展望に優れる。北側に「赤ハゲ」が並ぶ。名称も「赤ハゲ」に揃えたと思われる。藩政時代を含め「白兀」としたものが多いが、ここでは国土地理院の現行の地形図の表記に従った。

☐大窓☐赤ハゲ

すなくぼいけ (砂くぼ池)

立山川右岸段丘上にある泉。標高約1020m。清



西面(中山から)

烈な水を大量に吐き出している。古図では井戸としたものもある。

すずりがいけ (硯ヶ池)

別山の頂上にある径 20m に満たない小さな池。標高約 2870m。大正の初期これを水場にその畔で劔岳登頂にそなえるキャンプがなされた。

すなくぼいわや (スナクボ岩屋)

立山川の砂くぼ池の近くにある岩屋(半開、庇状)。

せいぞうぼう (清蔵坊)

早月尾根上部に出る入道形の雪形。富山平野、およびその方角から望見される。池ノ谷初登攀者の石黒清蔵にちなんで、広瀬誠が提唱した。

せいめん (西面)

山体の西側。別山乗越一本峰—三ノ窓を結ぶ主稜線の西側。主として東大谷・池ノ谷の流域を指す。

せんにないけ (仙人池)

仙人峠から東へ約 100m の地点にある高山湖。標高約 2080m。径約 20m。ハッ峰や三ノ窓周辺の針峰群を映す絶好のビューポイントとして知られる。池畔に仙人池ヒュッテがある。命名は 1926(大 15) 年、冠松次郎らによる。当初は仙人の池と呼ばれた。

せんにないけひゅって (仙人池ヒュッテ)

仙人池池畔に建つ。標高約 2080m。樺平から劔岳への入山路の中継点。1958(昭 33) 年創建。

せんにないわや (仙人岩屋)

仙人谷の中ほどの左岸台地にある。標高 1520m。巨大な花崗岩の一枚岩を屋根にし内部は十畳間ほどの広さを持つ。土間にはヒカリゴケがある。奥の壁に南北朝時代の初め頃の作とされる石仏が安置されていて、山伏が修行や宿舎に使ったと推察されている。^仙人、の地名の発生はここからか。文化財につき一般人の立入禁止。近くに仙人温泉小屋がある。

せんになおんせん (仙人温泉)

仙人谷の谷中右岸、標高約 1550m に湧出する温泉。宿泊施設は左岸にある。歴史が古く、白萩川源流に残っている西仙人谷、東仙人谷などの地名はここへ通う道筋だったことからとされる。また明治初年、西仙人温泉の名で大規模な施設が開発されたが、あまりに僻遠のためほどなく廃業。しかしその後も**仙人湯**・仙人の湯の名で断

続的に、あるいは細々と継続した。

せんになおんせんごや (仙人温泉小屋)

仙人谷の中ほどの地点左岸にある。対岸から温泉を引湯。樺平と劔岳を結ぶ入下山路の中継点。標高約 1540m。近くに仙人岩屋。かつては**仙人湯小屋**ともいわれた。

せんになしんどう (仙人新道)

仙人山南尾根に刻まれた山道。劔沢二股から仙人峠の間をいう。1958(昭 33) 年、仙人池ヒュッテの創建に伴い、翌 1959(昭 34) 年に開削された。劔岳と黒部下ノ廊下を結ぶコースの利便性が改善された。☞仙人池ヒュッテ

せんになだに (仙人谷)

黒部下ノ廊下左岸側の支流。仙人山を源流として北東に流れて本流の仙人ダム湖に注ぐ。詰め上がったところが仙人峠。中間部の谷懐に仙人谷温泉、仙人岩屋がある。黒部と劔岳を結ぶ入下山路とされたが、仙人谷温泉より下は右岸尾根上に 2006(平 18) 年、雲切新道が新設されたのを契機に閉鎖された。☞雲切新道 ☞仙人湯 ☞仙人温泉小屋

せんになとうげ (仙人峠)

黒部峡支流の仙人谷を登りつめた鞍部。別名仙人乗越。標高約 2080m。北西に仙人山、東に南仙人山。劔岳北面の眺めは絶景。近くに仙人池、仙人池ヒュッテがある。☞仙人池

せんになやま (仙人山)

劔岳北方稜線の池ノ平山から東へ延びる山稜上のピーク。標高 2211m。さらに東に南仙人山、西の池ノ平山は往時**西仙人山**と呼ばれていた。また北へ北仙人尾根を延ばす。当山南西面 9 合目というあたりを池ノ平と仙人谷峠を結ぶ登山道がめぐるようにして通っている。山頂へは池ノ平小屋から踏み跡をたどると約 0.3 時間。北東に黒部支流の仙人谷。山名はここから。

せんになゆ (仙人湯) → 仙人温泉

せんになゆごや (仙人湯小屋) → 仙人温泉小屋

ぜんけん (前劔)

劔岳の前衛峰。別山尾根上、本峰の南約 0.5km にある。標高 2813m。まえつるぎともいわれる。またほとんど死語化したのが、**軍隊劔**、**軍劔**(ぐんけん) などとも言われた。東へ前劔東尾根を、西側へ前劔西尾根を延ばす。☞前劔東尾根☞前劔

西尾根☐軍隊劔

ぜんけんひがしおね（前劔東尾根）

前劔から南東へ延びる短い尾根。別山方面からすると源次郎尾根と並行、その前面にある。尾根は松葉形に二分かれし、平蔵谷側のものを右尾根、武蔵谷側のそれを左尾根と呼んでいる。両者の間の切れ込みがAルンゼ、武蔵谷から左尾根に突き上げるのがB・Cルンゼ。いずれも登攀ルートとされる。登攀ルートはこのほかにCルンゼ奥壁（大系）がある。

ぜんけんにしおね（前劔西尾根）→東大谷

ぜんけんにしかべ（前劔西壁）→東大谷

ぜんけんざわ（前劔沢）→東大谷

ぜんけんのもん（前劔の門）→別山尾根

そでのたん（袖ノ谷）→八ッ峰

ぞろめき（ゾロメキ）

早月川と支流小又川の出合い付近をいう。ゾロメキ発電所（白萩発電所の通称）の名で知られる。同発電所は大正～昭和初期（馬場島に山小屋が建設されるまで）劔岳の西面からの登山の拠点として重要な役割をなす。ゾロメキは石がぞろぞろ転がっているガレ場の意とされる〈参考〉濱浦幸泰著『ゾロメキの地名由来について』（2003私家版）。

た 行

だいだっそうるんぜ（大脱走ルンゼ）

平蔵谷源流の本峰頂上に直接突き上げるルンゼ。1999年加藤雅昭（大阪あすなろ山岳会）がここをスキー滑降、その記録を発表してから知られるようになった。文部省（当時）登山研修所から出たことば。ザイルで繋がった研修中の17名がここを下降中に滑落、しかし全員無事。「さながら大脱走！」というのが謂われ（岳人630）。☐インデアンクローアール

たいらのいけ（平の池）→池ノ平

たかのすわり（たかのスワリ）

白萩川にある峡谷部の名。馬場島発電所の取入口から池ノ谷出合い下辺りまでの数百メートル。右岸に高巻き道がある。「スワリ」は土地のことばでゴルジュ（既出）の意。`たか、は高（=上）。下流にあるゴルジュ（位置不詳）に対応する名称。「鷹の巣割」等と当てた例が見られるが誤り。☐白萩川

たてやまがわ（立山川）

劔岳西面を流域とする谷。馬場島で白萩川と合流早月川となる。主な支流に毛勝谷、東大谷、檜谷がある。古くから立山の登拝道とされたことからこの名。源頭の峠が室堂乗越。

たきのたん（滝ノ谷）→八ッ峰

たけぞうだん（武蔵谷）

劔沢の支流。前劔と一服劔の間の鞍部へ突き上げる小さな谷。夏は雪渓。昭和の初期、佐伯武

蔵（立山町芦峯寺）が、平蔵谷と間違えて下ったことからこの名。

たけぞうのこる（武蔵ノコル）→別山尾根

ちゅうおうかべ（中央壁）→劔尾根

ちゅうおうるんぜ（中央ルンゼ）→劔尾根

ちょうじろうだん（長次郎谷）

劔沢の支流。劔岳東面に突き上げる。通年雪に覆われている。中程にある熊ノ岩で右俣、左俣に分かれ前者は池ノ谷乗越に、後者は長次郎のコル達する。劔岳の登頂コースとして、八ッ峰や源次郎尾根の側壁登攀のアプローチとして登降される。1907（明40）年陸地測量部の柴崎芳太郎らによる登頂はこの谷を上下した。2年後の吉田孫四郎（既出）らの登山も同じ。このとき、ガイドの宇治長次郎（大山村和田＝現富山市）の名をとって命名された（大成7）。

ちょうじろういわや（長次郎岩屋）

長次郎谷下部左岸にある庇状の岩小屋。出合いから約1km上流、標高約2250m。ちょうど八ッ峰下半の取り付き点に当たりよい目印になっている。1923～4（大12～3）年八ッ峰を登攀した早大パーティーを筆頭に初期には開拓の拠点のとして利用された。なおこれは八ッ峰の岩屋の名でも通っている（大成8）。

くまのいわ（熊ノ岩）

長次郎谷の中ほど、同谷を二分する岩尾根

(長次郎尾根)の末端部をいう。1909年吉田孫四郎らの登山(柴崎芳太郎らの次の登頂)のとき、付近の雪渓上でクマが目撃されたことから命名された。〈出典〉吉田孫四郎「越中劔岳」-『山岳』5年1号(大成7)「突き当たりに巨巖の雪を衝いて立てるあり、名付けて熊の岩との建議直ちに可決す」。

ちょうじろうひだりまた(長次郎左俣)

長次郎谷は中ほどにある熊ノ岩で二分、上流に向かって左のものを左俣、右を右俣とされる。左俣は長次郎のコルに達する。1907(明40)年陸地測量部の柴崎芳太郎による登頂はこの谷の雪渓を上下した。

ちょうじろうのこる(長次郎のコル)

山頂の直ぐ北(約0.2km)にある主稜線上の切れ込み。長次郎谷(左俣)を登り詰めるとここに達する。標高約2870m。長次郎の窓、長次郎の西窓などとしているものもこれを指す。明治末の柴崎芳太郎らの登頂ルートもここを中継。☐長次郎左俣

ちょうじろうみぎまた(長次郎右俣)

長次郎谷は中ほどにある熊ノ岩で二分、上流に向かって左のものを左俣、右を右俣とされる。左俣は長次郎のコルへ、右俣は池ノ谷乗越に達する。左俣よりも狭くて急。ハッ峰登攀後の下降ルートとして、あるいは東面と三ノ窓方面を結ぶ経路として登降される。昭和の初期一部で熊ノ岩沢とも呼ばれた。

ちょうじろうみぎまど(長次郎右窓)→池ノ谷乗越

ちょうじろうおね(長次郎尾根)

長次郎谷を上部で右俣、左俣に分ける岩尾根。長次郎ノ頭のやや東の主稜線に発し熊ノ岩に達する。これとは別に今日の劔尾根が1940年頃までこの名で呼ばれていた。☐劔尾根

ちょうじろうのずこ(長次郎ノ頭)

長次郎谷の源頭のピーク。標高約2930m。北西方向に劔尾根ノ頭と並ぶ。南東へ長次郎尾根を派生する。

ちんね(チンネ)

劔岳を代表する岩場。ハッ峰ノ頭の北側に並ぶ山頂(標高約2860m)から。東へ鋭い岩稜を薙ぎ落とす。この北面が2~300mの絶壁をなし、チンネ正面壁とされる。これが小窓ノ王と向き合い、三ノ窓の鋭い切れ込みをつくる。富山平野ではやや斜になるが魚津以東の黒部市、朝日町の一部から見える。1927(昭2)年第三高等学校の高橋健治らが初登攀。あわせて命名も。以来優れたクライミングゲレンデとして支持され、現在まで20を超えるルートが開かれている。チンネはドイツ語で「巨大な岩壁を持つ鋭鋒」の意。日本では固有名詞化している。〈資料〉高橋健治「劔岳東面」(『三高部報』第6号-大成8)「三ノ窓に向かって左手にそびゆる尖峰は三ノ窓チンネ(尖閣 Zinne)と名付けたい」。なお当峰がチンネとされる以前は三ノ窓の頭がこれを指した。新田次郎の小説『チンネの裁き』はここを舞台としている。

下部フェース(中央バンドより下)

ちゅうおうばんど(中央バンド)

正面壁(以下`壁、と略す)の中間を左右に横断ちにする岩棚。これが壁を上下に分けている。ここを伝って下半と上半のルートを随意につないで登攀されている。バンド(英=帯)は、横長の岩棚をいう。

ちゅうおうちむにー(中央チムニー)

下部フェースの中ほどにあって左下から右上へ傾斜角約70度で直線的に走る摂理。中央バンドに達する。チムニー(英=煙突)は人が入れるくらいの割れ目。右上フェースへ繋ぐ登攀ルートとして最も登攀者が多い。また登攀ルートを区分するときの基準とされる。初登攀は1932年RCC^{※注1}北条理一他(年表)。これより右側には北条・新村ルート(1937大阪OKT^{※注2})、登攀倶楽部ルート(1974同倶楽部木村智他)、右方ルンゼルート(1935早大金尾実他)がある(大系5)。一方左側には、左方ルンゼとの間にあるのが中央チムニー左フェース魚高ルート(1950同校高瀬具康他)、同ベルニナルルート(1962同会堀江栄次他)がある(大系5・年表)。

※注1 ロッククライミングクラブ

※注2 大阪管見社登山部

さほうるんぜ (左方ルンゼ)

壁の左端からやや内に入ったところにある岩溝。概ね平板な壁にあって珍しい凹みとして注目される。下端から左稜線の肩へ抜ける。上部は漏斗状に広がり左稜線から中央バンドの範囲へ自由に出られる。正面壁の初登攀ルート。1927 (昭2) 年第三高校の高橋健治、今西錦司、西堀栄三郎 (大成8・年表)。積雪期初登攀もここから。1936年4月 関西学院大塩津正英他 (大成9・年表)。

ひだりしたかんで (左下カンテ)

左方ルンゼの左側にルンゼに沿うようにして立ち上がっている。カンテ (独) は直立した稜角。初登攀は1950年魚津高校高瀬具康他 (大系5・年表)。

さりょうせん (左稜線) - 下半

チンネを岩稜として捉えた場合その主稜。正面壁を右に、左にハッ峰を見ながら登る。チンネのうちで最も長く充実した登攀ルートとされ人気も高い。初登攀は1934年大阪OKT北条理一他 (大成9・年表)。なおこの右に下部ベルニナルルート (1957同会土井清他) がある (大系5)。

上部フェース (中央バンドより上)

うじょうふえーす (右上フェース)

中央バンド右端にピナクル (小突起) があってその上の部分。頂上へ抜けるルートが集中している。aバンド、b・c・d・e・fクラック、gチムニー、hクラックなどがあり、それぞれ登攀ルートとされる。この部分の初登攀は1933年甲南高校藤取二他 (大成9・年表)。

さほうかんで (左方カンテ)

左稜線から10m余り内側に入ったところにある。短いがハングを連ねた充実したルート。初登攀は1950年魚津高校高瀬具康他。なをこのルートと右上フェースの間に筑豊ルート (1960同会野見山信他) がある (大系5・年表)。

さりょうせん (左稜線) - 上半

下半に倍する鋭いナイフエッジ、難度も高い。初登攀は1930年 (神戸BKR^{※注}山埜三

郎・単独)。これが上部フェース全体の初登攀になる (大成9・年表)。

はな (鼻)

左稜線上半取り付き直後、テラスの上6~7mの位置にある顕著なオーバーハング (英=庇状地形)。ルート中のキーポイント。1927年のチンネ初登攀時からの呼称。この時は登れず、南面を迂回した。直登成功はこの三年後。神戸BKR^{※注}山埜三郎 (単独)。
※注 ベルク クレットル フライン (出典) 遠藤甲太著『登山史の森へ』平凡社 (2002)。

つるぎいけ (劔池)

池ノ平の池。藩政時代の名。→池ノ平

つるぎおね (劔尾根)

池ノ谷を二分する岩尾根。劔尾根ノ頭 (長次郎ノ頭の北西側に並ぶ) 池ノ谷二俣に達する。劔岳の代表的な岩場で、主稜のほか、両側の側壁にも多くの登攀ルートがある。1930年頃から岩場として注目を集める。初登攀は上半が1933年OKT (既出) の角口想蔵他によって、下半は1936年大阪商大戸塚暢之他によってなされた。当時は劔尾根でなく長次郎尾根といわれた。もうひとつの別名として池ノ谷尾根がありこれも1950年頃まで用いられた。一帯の細かい名称は1950~5年、高瀬宗章 (富山大学)、高瀬具康 (魚津高校) の兄弟を中心にしたグループによって現行のように整理された。

主稜線

つるぎおねのづこ (劔尾根ノ頭)

劔尾根・奥壁の頂点。長次郎ノ頭の北約0.1kmに並ぶ。標高約2910m。開拓当初 (1935年ごろ) はこれをドームとした。

こるえー (コルA)

劔尾根ノ頭の北約0.1kmにある主稜線上の鞍部。標高約2800m。以下尾根の末端へ向けてコルには順次B~Eの名称が与えられている。中央ルンゼを登りつめるとここに出る。

こるびー (コルB)

ドームの南東側直下の鞍部。標高約2680m。劔尾根の上半、下半の境界とされる。また中央ルンゼ・ドーム稜へのアプローチとしても越えられる。登降とも容易。

横浜市立商校 OB 市川敏雄他（年表）。

※注 1951年発表の若林啓之助（富山高校 OB）の「バンバ島よりする劔岳西面」（岳人 39-1951）の付図では「中央ルンゼ」とあり、次号岳人 40の高瀬宗章「三ノ窓周辺の岩場（下）」では単に「ルンゼ」または「Rルンゼ」とまだ混乱している。三年後の岳人 76（1954年8月号）は沢村幸蔵（ベルニナ山岳会）の「池ノ谷中央ルンゼ 概念と登攀の可能性」を載せている。若林案で固まったことを意味する。初登攀はこの文章発表の約一ヶ月後というのは劇的。

ちゅうおうかべ（中央壁）

中央ルンゼと α ルンゼ間を占める V 字形のスラブ。初登攀は 1962 年、成城大橋村一豊他（山溪 253・年表）。

どーむかべ（ドーム壁）

劔尾根ドーム（P1）の南西面の α ルンゼと γ ルンゼの間を占める大きな壁。早月尾根 2600m 付近から正対して観察できる。初登攀は 1942（昭 17）年 7 月関西学院大井上奨他による（年譜 5）。中央ルンゼを隔てて対岸にドーム稜があるのは紛らわしい。

にほうなんぺき（二峰南壁）

ドーム壁の左（西側）に並ぶ高さ 300m 程の絶壁。どのルートも 2 峰に登りつく。開拓はこのあたりで最も新しく 1960 年前後。まず 1958 年 7 月ベルニナ山岳会によって壁の左端にルートが開かれる（年表）。引き続き正面ルート（1960 成城大学・筑豊山岳会合同）、右岩稜ルート（1962 神戸山岳会）などが開かれた（年表）。

あるふあるんぜ（ α ルンゼ）

劔尾根側壁に食い込む池ノ谷右俣側のルンゼ。（以下下流側へ β ルンゼ・ γ ルンゼが続く）中央ルンゼ F3 の上から劔尾根コル B へ突き上げる。比較的容易に登降できることから中央ルンゼ上半や奥壁へのアプローチとして使われる。中央ルンゼ左俣とも表現される。初登攀は 1936（昭 11）年 8 月甲南高校赤松二郎他による（大成 9）。命名は 1952 年、魚津高校^{※注}。

※注 柴田賢治「劔尾根ガンマルンゼよりドーム」（魚津高校『山岳部報』4号-1954）に次のように

ある。「この名称は私達が勝手につけたものであるが、他に適当なものがなかったのでお見逃し願いたい」。これは α ルンゼ・ β ルンゼも同じと思われる。同様の意味の記述が高瀬具康（魚津高校 OB）の「劔岳西面池ノ谷の岩場」（岳人 76-1951）にもある。「この方面の岩場（の）名称は関学の二記録が未発表であるため、私たちが勝手につけたものが多く、適当でない名称もあるかもしれないがお見逃し願いたい」。なおここでの提示が高須茂、高瀬具康著『劔岳 登攀ルート解説』（1956 築地書館）の基本となる。

べーたるんぜ（ β ルンゼ）

中央ルンゼ支流。劔尾根ドーム壁下部に食い込むルンゼ。初登攀は 1958 年、西京大（現京都府立大）OB 小山貢他（岩雪 4）。

がんまーるんぜ（ γ ルンゼ）

劔尾根側壁に食い込む池ノ谷右俣側のルンゼ。劔尾根コル C に達する。初登攀は 1936（昭 11）年 8 月甲南高校福田泰次他による（大成 9）。

北側（池ノ谷左俣側）側壁

あーるわん（R1）

劔尾根北側面に食い込むルンゼ（以下 R10 まで同じ）。その一番目（上から）。R2 から分岐、最も短い。

あーるつう（R2）

コル B へ突き上げる。登降とも容易。劔尾根下半からの退路、上半への取り付き、あるいは中央ルンゼ核心部へのアプローチとして使われる。

あーるすりー（R3）

「く」の字形に曲がった劔尾根のその曲り目にある。ドームの頂上へ突き上げる。最上部にある残雪をふくめて三ノ窓からよく見える。登攀は容易。1933（昭 8）年 OKT の角口想蔵、笈田正雄による劔尾根上半の初登攀の取り付きルート（大成 9）。

あーるふおー（R4）

ドームの北面にくい込む。一連のルンゼの中で最後（1962）に登攀された。難度も高く、特に積雪期登攀では現代的価値が高い（年表）。

あーるふあいぶ（R5） あーるしっくす（R6）

ドームの北面にくい込む。壁の中程にある

コルを越えてR5からR6の上半へ登り次ぐ。劔尾根核心部へのアプローチとして登られる。初登攀は1950年魚津高校高瀬具康他(大成10・年表)。

あーるせぶん (R7) ~あーるないん (R9)

並び合って劔尾根の下半に突き上げる。それぞれが充実した登攀ルート。1956~62年にかけていずれもベルニナ山岳会によって登攀された(年譜5・年表)。

あーるてん (R10)

コルEに通ずる。傾斜も緩く容易。劔尾根下半取り付きの経路とされる。

どーむきたかべ (ドーム北壁)

ドームを基準に劔尾根はくの字形に折れるが、折れ目の北側(下側)に広がる絶壁。すぐ右側に接するR4とともに左俣側きっての登攀対象とされる。ベルニナルート(1967)北稜山岳会ルート(1970)がある(大系)。

つるぎがだけ (劔ヶ岳) →劔岳

つるぎごぜん (劔御前)

別山尾根コースの最初のピーク。劔沢カールをはさんで別山の対岸にある。標高2776.6m。三等三角点が置かれる。劔岳南東面に対する絶好の眺望地。劔御前は劔岳に対する尊称。古くは劔岳の礼拝所であったとされる。大正から昭和前期にかけての地形図では鶴ヶ御前と表記されたがあと字。

つるぎごぜんごや (劔御前小屋)

別山乗越(標高約2750m)にある。1930(昭5)年創建。同年1月劔沢で起こった雪崩重大事故を契機に劔沢への中継点として建設が急がれた。そのほか別山尾根コースへの拠点、立山三山と黒部・大日岳方面を結ぶ中継点としてなど、交通の要とされる。名称は北0.8kmにある劔御前(山)から。☞別山乗越 ☞劔沢小屋

つるぎさわ (劔沢)

黒部川の四大支流のひとつ。南北に走る劔岳の主稜線の東側の水をすべて集める。中間部の二股で北股と南股に分岐。北股は三ノ窓谷、小窓谷を源流とし、南股には平蔵谷、長次郎谷、真砂沢などがある。いずれも厚い万年雪を堆積させ、岩と雪の殿堂といわれるゆえんとなっている。一方二股から下流は深い峡谷をなし、劔の大滝

を経て黒部下ノ廊下に注ぐ。この合流点が十字峽。南股源流のカールの底が別山平で、劔沢小屋や野営場、山岳警備隊の派出所などがあって劔岳登山の代表的な基地となっている。藩政時代の絵図では劔谷、劔沢谷などとしたものもある。また佐々木助七(黒部市音沢のガイド)は西五陵としている*注。☞劔ノ大滝・別山平

*注 佐々木助七は棒小屋沢を東五陵、劔沢の南谷を西五陵と呼んだとされる。「五陵」は当て字か。後立山の「五竜」との関連は?

つるぎさわのっこし (劔沢乗越) →別山乗越

つるぎさわごや (劔沢小屋)

劔沢源流のカールの底(別山平)にある山小屋。標高2535m。1924(大13)年創建。劔岳最古の山小屋として実績と信頼が厚い。近くに野営場管理所、文科省登山研修所前進基地などがある。1930(昭5)年1月大雪崩で壊滅、宿泊中の登山者、ガイド6名が犠牲になった。これを初めとし破壊、移築、改築を繰り返した*注。初期の文献では劔ノ小屋、劔小屋、源次郎の小屋などとされた。隠語的にはサワの小屋とも。☞劔沢

*注 山小屋には罹災・改廃はついてまわる。しかし劔沢小屋のそれは登山史上の重大事件として特筆に値する。

つるぎさわせっけい (劔沢雪溪)

別山乗越から真砂沢出合いまで約3kmに及び、白馬大雪溪、針ノ木雪溪と並び北アルプスの三大雪溪とされる。別山乗越直下には過年度の雪が年毎に横縞を描いて堆積、ハマグリ雪と呼ばれ、氷河の一種とされる。また北股の小窓雪溪、三ノ窓雪溪はその芯の氷体が2012年日本雪氷学会によって日本列島に現存する氷河と認定された。☞劔沢

つるぎだけ (劔岳)

日本アルプスを代表する一峰。北アルプス立山連峰にあって立山の北側に並ぶ。山体全域が富山県に属す。標高2999m。当山を構成するのは飛騨変成岩の花崗片麻岩とされる。山骨を研ぎ出したような鋭利な岩稜、それを集めるようにして山頂が天を突くという、特異な山容を示す。谷々を埋める厚い残雪を合わせて、岩と雪の殿堂と言われ、日本の近代登山の最も重要な舞台となった。はじめての登頂は1907(明40)年、陸軍参謀本部陸地測量部の柴崎芳太郎らであったが、この

時すでに、山頂には古い時代の鉄剣と錫杖の頭が捧げられていたのは有名である。しかし立山信仰では当山は禁忌の山として登拝が厳しく戒められた。反面また立山連峰のシンボルとして崇められ、雄山を始め周辺の各山頂が当山の遥拝所とされた。

立山連峰の主脈と重なる主稜線が山頂を挟んで南北に走り、これが山体を東西に分ける。東面の谷々は剣沢に集まり黒部川の一源流となる。西面の谷は山麓馬場島で早月川にまとまる。当山は立山登山の施設を足がかりに東面から開拓されていた。それは今日も変わらず、剣沢の源頭のカールの底に山小屋や山岳警備隊の詰所があって登山の基地になっている。一方アルペンルートの交通機関が閉鎖される冬期間は西面山麓の馬場島が根拠地になる。

山名の謂われは、鋭く天を突く山容からと思われる。剣という名称が記された最初の文書は、1585(天正13)年、豊臣秀吉が越中佐々成政攻略にあたり近畿の寺社大名に送ったの書状とされる。これには「先勢東は立山つるぎの山麓まで悉く放火せしめ候……」とある。以来「剣」の意味を基本に、**剣ヶ嶽**、**剣峰**、**剣山**等々多様な呼ばれ方をしてきた。用字においてはさらに複雑で当用漢字の「剣」をはじめ**劔**、**劔**、**劔**、**劔**など、偏と旁の組み合わせで十指を超える表記がなされてきた。地元上市町では2003年町議会でこの問題を取り上げ「劔」に統一すべく国土地理院へ申請、2004年発行の2.5万分の1図から**劔岳**をはじめ関連する**前劔**、**劔沢**、**劔大滝**などすべてが「劔」に修正された。本辞典においても引用文を除いて「劔」で統一した。

つるぎだけほっぽうりょうせん(劔岳北方稜線)

劔岳から北へ、黒部川と、早月川・片貝川との流域を分ける脊梁をいう。一般には小窓辺りまでをいうが、広義には赤谷山、毛勝三山、さらには僧ヶ岳辺りまで、立山連峰北半全体をいう場合もある。1950年頃、地元の魚津高校山岳部で言われ

始めたとされる^{※注}。

※注 同校の『山岳部報』1号(1949)に「我々は赤谷山以北の山嶺を劔北方尾根と呼んでいる……」とある。

つるぎのいえ(劔の家)

バンバ島小舎の通称。馬場島の立山川、白萩川合流点左岸(現中山登山口広場)にあった。創建は1933(昭8)年。1935年前後の積雪期登山の開拓期には西面の拠点として重要な役割を果たした。戦後管理が富山高校(旧制・現富山大学・以下同じ)に移管、**富高ヒュッテ**と呼ばれた時期もあった。1956(昭31)年立山川対岸に馬場島荘が出来て登山基地としての役目を終え廃絶した。☐馬場島荘

つるぎのおおだき(劔ノ大滝)

劔沢の下部廊下に懸かる。深い峡谷が複雑に屈曲しその全体像を隠していることから**幻の滝**とも言われる。十字峡からさかのぼって約1.5km、標高約1100m地点に滝壺。高さ約140m。九段で構成されているとされる。冠松次郎郎が下流から、上流からと何度も迫ったが滝に到達できたのみで登攀も下降もできなかった。1962年鵬翔山岳会によって初めて登攀された。1982年高嶋石盛(宇奈月町=現黒部市)が単独で各滝に登攀、映像に記録した(高嶋石盛「劔大滝直登記」『日本の名山8劔・立山と北部北アルプス』1983ぎょうせい・年表)。

でんぞうごや(伝蔵小屋)→早月小屋

とうめん(東面)

山体の東側。別山乗越一本峰—三ノ窓を結ぶ主稜線の東側。主として源次郎尾根とハッ峰を指す。

どーむ(ドーム)→劔尾根→小窓尾根→毛勝谷

どーむりょう(ドーム稜)→池ノ谷右奥奥壁

とらいし(虎石)

立山川にあった名所的巨石。菊石とともに藩政時代の絵図に出てくるが現在は不明。☐立山川 ☐菊石

どんといわ(ドント岩)→平蔵岩

な 行

なかおね (中尾根) → 東大谷

なかせんにんだん (中仙人谷) → 中ノ又

なかのまた (中ノ又)

白萩川の一源流。大窓へ突き上げる。左右に西仙人谷、東仙人谷があることからこの名。ともに黒部仙人谷の仙人湯への経路とされた。また大正初期には池ノ平山東面で稼動したモリブデン鉱山への重要な経路とされた。国土地理院の現行の地形図では中仙人谷としている。

なかまた (中俣) → 東大谷

なかのひだりまた (中ノ左俣) → 東大谷

なかのみぎまた (中ノ右俣) → 東大谷

なきざか (泣き坂)

小窓谷から池ノ平へ登るときの急坂 (山口督『立山・劔・黒部溪谷』1962 実業之日本社)。仙人新

道開設に伴って通行する人が激減したこともあって、この名も廃れた。☐仙人新道

なむのたき (南無の滝) → 真砂ノ大滝

にしせんにんだん (西仙人谷)

白萩川の一源流。小窓へ突き上げる。池ノ谷左俣に並ぶ大きな雪渓をなす。人里から仙人谷・仙人湯などへの一経路とされたことからの名。対応する地名に中仙人谷、東仙人谷がある。黒部峡谷の仙人谷流域ではないことに注意。

にしせんにんやま (西仙人山)

現在の池ノ平山の古称。仙人山の真西に位置する。☐池ノ平山

にーどる (ニードル) → クレオパトラニードル → 小窓尾根

にほうなんべき (二峰南壁) → 劔尾根

は 行

はこのたん (函ノ谷) → ハッ峰

はしごだんのっこし (ハシゴ谷乗越)

真砂尾根 (真砂岳から北東に延びる尾根) の、真砂岳と黒部別山の間鞍部。標高約 2015m。黒部ダム、内蔵助平と劔沢を結ぶ経路の重要中継点。ハッ峰東面の偵察に勝れる。ハシゴ谷は峠の劔沢側の谷。

ばつとれつざわ (バットレス沢)

池ノ谷右俣源流のひとつ。長次郎ノコルへ突き上げる。本峰西北バットレスへのアプローチとされることから。奥壁右岩稜に取り付くときもこれを下る。

はな (鼻) → チンネ

はまぐりゆき (ハマグリ雪)

劔沢の最源流、別山乗越直下の残雪をいう。過年度の雪が、年毎に年輪のように横縞を描いて堆積していることからこの名で呼ばれ、氷河の一種とされる。

はやつきおね (早月尾根)

劔岳西面の主尾根。山麓の馬場島から一直線に山頂へ突き上げる。劔岳西面を池ノ谷と東大谷

に分け、富山平野からの山容に凛々しい均整を与えている。全長約 7km。馬場島から山頂までの標高差 2300m。所要時間約 10 時間の試練のコース。冬季登山では最も基本的なコースとされる。途中 2200m に早月小屋がある。初踏破は 1923 (大 6) 年冠松次郎ほかによる。このことから芦峯寺のガイド衆の間で冠尾根と称されたが、冠が「早月尾根」の名で記録を発表したのでこの名で定着した。名称は早月川から。

まつおだいら (松尾平)

早月尾根末端にある堆積段丘状の平。880 ~ 1030m にまたがり 5 ~ 6 段ほどに分かれて平らが続く。地形図の 1047m 標高点がそれとして特定されてからは、その上段のものに松尾奥ノ平という新しい地名を加えることもある。〈初出〉早月尾根を初登破 (1917 年) した冠松次郎の記録「劔越え」- 『山岳』13 年 1 号 (大 7) 「右方は大分上りになって、その上の松尾平 (宛字) ^{※注}に出るので……」。

※注「宛字」としているが、「マツオ」は尾根の末端、

「末尾」の意味だろう。立山の松尾峠も同様。

きわだいら (木和平)

松尾平以来の緩傾斜帯。西端に三等三角点(点名、木和平) 標高 1920m。三角点建設の時の登路とされたキワラ谷から取った名と思われる。

まるやま (丸山)

早月小屋の北西約 0.1km にある小山。標高 2224m。昭文社の「山と高原地図」『立山・劔岳』の最新版が初出か。

にせんろっぴやく (2600)

標高約 2600m。二六〇〇メートル峰などともいわれる。末端からひたすら登ってきた尾根がはじめて迎えるピーク。東大谷の左尾根が合流。毛勝谷の頭になる。古くからコース上の基準の役割を果たしてきた。森林帯をぬけ、本地点から岩尾根がはじまる。北側に草地、残雪があり、東大谷の岩場を登る時の根拠地とされた。

ひがしおたにのっこし (東大谷乗越)

2600 の頂上側約 0.1km にある鞍部。標高約 2580m。〈初出〉(ルート解説) か。

えぼしいわ (烏帽子岩)

早月尾根上部にある岩搭状の小ピーク。標高約 2700m。南西側は烏帽子岩レンゼを落とす。1934 (昭 9) 年 4 月、日本大学隊の記録 (大成 9 P.167) に出てくるのが初出か。

おうかん (王冠)

烏帽子岩上部にある小突起。標高約 2800m。東大谷左俣上部の岩峰を指して命名されたのだが、尾根上の瘤との異同がはっきりしない*注。命名は吉沢一郎。〈出典〉吉沢一郎著『登高記』(既出)の中に次のようにある。「私達は左手に出て居る岩峯を王冠としその右手のやゝ上にあるのを二本爪と稱ぶ事にした」。

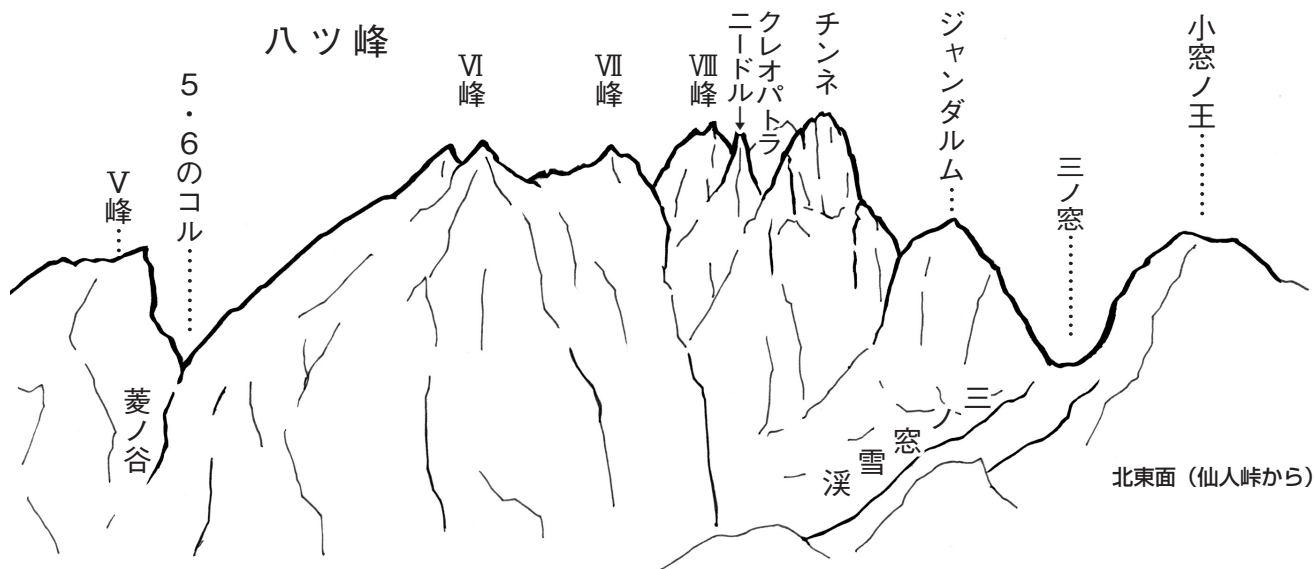
*注 『THAKTO』5 (1964 大阪府立大学山岳部) 他でも尾根上のピークとして扱われている。

ししがしら (獅子頭)

早月尾根最上部にある岩峰。山頂の西約 0.2km。標高約 2900m。東大谷中尾根の頭になる。早月尾根の登山コースは北側(池ノ谷) 側を迂回。命名は 1940 年頃、藤平正夫ら富山高校山岳部のグループ。

かにのはさみ (カニの鋏)

早月尾根最上部、山頂の西約 0.2km 地点にある岩塔。標高約 2900m。先端が二つに割れていることから命名されたが、その後(昭 44 の豪雨時ともいわれる) 片方が崩壊、名称が実態を伴わなくなり、近時は位置を正しくとらえられていない記録がある(参考) (岳人 548)。命名は 1919 (昭 4) 年吉沢一郎。〈出典〉『登高記』(既出)「峯頭は二つに分かれ仰いで右手ののにケルンがある。私達は之を仮に蟹の鋏と稱んで置く」。南側(東大谷中俣上部) へ短い岩稜を指し延ばす。これが蟹の鋏の岩稜と言われ一登攀ルートと



される。☞蟹の鉄の岩稜

はやつきごや (早月小屋)

早月尾根 2200m 地点に建つ山小屋。同コースによる入下山の重要な中継点。キャンプ可。旧称伝蔵小屋。創建は 1971 (昭 46) 年。
いけのたんみぎまたまくいわ(池ノ谷右俣幕岩) 池ノ谷右俣左岸(劔尾根の対岸)に二俣から上流へ 1km 弱程にわたって帯のような壁が続く。ここに魚津岳友会が 1981 年～1984 年ルート開拓を展開した。同会会報『ZINNE』16 (1987) では「早月尾根池ノ谷側フランケ」の名のもとに記録されているが、本辞典に取り上げるにあたり、見出しのように改めた。前記会報 16 からルート名のみを列挙する。(下流側から)・二俣ルンゼ・淀川右ルンゼ・淀川中央ルンゼ・淀川左ルンゼ・菱形ルンゼ・中央リッジ・三段カンテ・へびクラック

はやつきがわ (早月川)

劔岳西面の立山川、白萩川は馬場島で合流、早月川となり、途中小又川、鍋増谷、小早月川を合わせて富山湾に注ぐ。日本屈指の急流。流域は上市町・滑川市・魚津市に属する。万葉集には延槻の河(はひつきのかは)としてその名をとどめる。早月尾根はこれより。☞立山川・白萩川

はやつきごや (早月小屋) → 早月尾根

ばんばじま (馬場島)

早月川の上流の立山川と白萩川の合流点の内側にできた堆積段丘、洲。広さ約 4hr。標高 700～780m。ミズナラ、ブナ、トチ、タテヤマスギなどの林。ナナカマド、タニウツギなどの低木帯もある。劔岳西面の各コースならびに赤谷山、猫又山、中山などの登山基点とされ、宿泊施設の馬場島荘やキャンプ場、馬場島警備派出所などがある。バンバは広場、シマは洲の意味だろう。

ばんばじまそう (馬場島荘)

馬場島にある宿泊施設。標高 750m。劔岳の各コースのほか赤谷山、猫又山などの登山基地。駐車場、キャンプ場あり。創建 1956 (昭 31) 年、現在の建物は二代目。

ひがしおたん (東大谷)

立山川の最大の支流。劔岳の山体の西面を形成する。大日連山から劔岳を見たときの面がそれ。

別山尾根の一般コースを頂上に向かって登るときの左手の深い谷。中俣、右俣、左俣に分岐。登攀ルートやそのアプローチとしてはさらに細かく分かれる。ただし流域全体が雪渓、岩場、ガレなどで、一般の登山者の登降できるコースはない。初踏破は 1929 (昭 4) 年吉沢一郎(東京商大 OB)らによる。〈記録〉吉沢一郎著『登高記』(既出)但しこのときは左俣から早月尾根に出たもので完登というには疑問が残るとされた。白萩川支流にも同名の谷があり、混同に注意。対照する地名として立山川対岸に西大谷がある。

別山尾根側・右俣、中俣周辺

しただき (舌滝)

東大谷の入り口付近にあって入谷者を阻む最初の滝。東大谷出合いから約 0.5km、標高約 1530m 地点にある。命名は富山高校山岳部藤平正夫ら〈出典〉藤平正夫「東大谷」富山高校『山岳部報』5 P.31「第一の瀧は丁度舌みたい恰好の岩が瀧を二分してあるので舌瀧と名附ける」。

ふたまた (二俣)

右俣と左俣の合流点。入り口から上流へ約 1km。標高約 1630m。

かみのふたまた (上ノ二俣)

右俣が中俣を分ける地点。二俣の上流約 0.5km、標高約 1770m。

みぎまた (右俣)

開いた手のひらのような分岐の一番右手のもの。源流は黒百合谷。黒百合のコルに突き上げる。劔沢をベースとして中俣、中尾根などに向かう時の下降ルート。劔沢から立山川へ出るときの近道ともされる。1927 (昭 2) 年、伊折の酒井竹次郎がこのコースで立山川に出たとされる〈出典〉吉沢一郎『登高記』(既出・年表)。対照語に中俣、左俣がある。

みぎおね (右尾根)

流域の南西端を限る尾根。上部は檜谷との分水嶺。出合い付近から別山尾根の劔御前の北約 0.5km の 2670 ピークに達する。標高差約 1300m を有し、訓練や流域の偵察の好対象とされる。

くろゆりだん (黒百合谷)

右俣の源流、黒百合のコルへ突き上げる谷。剣沢方面を根拠地にして東大谷の各ルートに取りつくときのアプローチとされる。関連する語に黒百合のコル、黒百合尾根（当谷の右岸の尾根）がある。また当谷支流にキンバイ谷の命名も同時になされたが（富山高校『山岳部報』5 P.33 図）その後使われた例を見ない。

なかまた（中俣）

東大谷の本流。山頂直下、早月尾根の蟹の鉢あたりに突き上げる。この支流に中ノ右俣、中ノ左俣、前剣沢、富高ルンゼなどがある。無雪期における本谷の遡行は雪・岩の総合力を求められる充実したルート。対照地名として右俣、左俣。初踏破は1935（昭10）年4月、立教大学山岳部山本正成らによる（大成9・年表）。無雪期の初登攀は1947（昭22）年7月、富山高校山岳部藤平正夫他（岳人5・大成9・年表）。

なかのみぎまた（中ノ右俣）

中俣の支流。一服剣西面を源流とする。

ぜんけんざわ（前剣沢）

中ノ左俣の支流。前剣西尾根、同西壁などへのアプローチとされる。

ぜんけんにしおね（前剣西尾根）

前剣から南西へ延びる岩尾根。前剣沢を下降して取り付く。初登攀は1951（昭26）年8月、魚津高校山岳部の高瀬具康（年表）。

まごつるぎ（孫剣）

前剣西尾根上の小突起（岳人39 P.27 図）。

ぜんけんにしかべ（前剣西壁）

前剣の南西面をなす岩壁。高さ約150m。登攀は前剣沢を下降して取り付く。初登攀は1956（昭31）年7月、九州電天山岳部の高木律生他。

なかのひだりまた（中ノ左俣）

中ノ右俣から分かれ、途中で前剣沢を分け、本谷は別山尾根の門に突き上げる。下部は雪渓、上部は急なガレ。チョックストンの滝を含め涸滝を連ねる。G1登攀のアプローチとされる。初登攀1948年富山高校藤平彬文他（日本山岳会富山支部会報『山岳』創刊号 - 1948）。

かすみのたき（カスミの滝）

中俣核心部へ左岸から落ちかかる滝。滝の上はG2、G3間ルンゼに続く。滝水が霧のように空中へ散ることからこの名。命名は1940年、富山高校山岳部斎藤義則（同校『山岳部報』5 P.22）。

じーわん（G1）

別山尾根の平蔵ノ頭付近から西側へ切れ落ちる岩稜。「G」はグラート（独＝岩稜）の略。以下G4まで同じ。別山尾根の門から中ノ左俣を下降して側から取り付く。初登攀は1950年神戸山岳会井上淳人他（年譜4・年表）。

じーつー～じーふぉー（G2～G4）

前項（G1）に続いて別山尾根の西側側壁に同じような岩尾根が南北に4つ並んでいる。G2'にはじまり一番北の端がG4。いずれもロッククライミングの対象とされ、各稜とも2～4のルートがある。スケールは100～150mと小さい。別山尾根から各尾根の間のガレを下降して取り付く。1950年前後、神戸山岳会、広島大学、魚津高校などによって開拓された。これらの地域の積雪期登攀では京都府立大学の活躍が際立っている（年譜4・大系）。

ふこうるんぜ（富高ルンゼ）

東大谷中俣の支流。中尾根に食い込む。無雪期中尾根に取り付くときのアプローチ。滝となって中俣へ落ち込む。ここは左岸を巻く。滝を越えると平凡な雪渓。源流はまた岩場となっている。1940（昭15）年7月、富山高校パーティが登攀。

おだまきるんぜ（オダマキルンゼ）

東大谷中俣の支流。中尾根チョンラピークに突き上げる。無雪期中尾根に取り付くときのアプローチ。1960（昭35）年8月京都府立大小山貢らが登攀、命名（岳人158）。

かにのはさみのがんにょう（蟹の鉢の岩稜）

蟹の鉢の尖峰から中俣上部へ伸びる鋭い岩稜。初登攀は1949年神戸山岳会井上淳人他（同会会報1号 - 1949）。

中尾根・左俣側

なかおね (中尾根)

東大谷の真ん中であって流域を左俣と中俣に分ける大きな尾根。二俣 (標高約 1630m) から頂上直下の早月尾根のシシ頭 (標高約 2900m) に達する。富高ルンゼ、駒草ルンゼなどはこの側面に込む。チョンラピーク (標高約 2720m) 以下はヤブ尾根のため、無雪期は富高ルンゼなどから取り付いて上半のみが登られる。流域の概念把握に便。初登攀は 1950 (昭 25) 年 4 月日本医科大山岳部パーティ。こときのガイド佐伯文蔵の名をとって文蔵尾根の提唱がなされたが普及しなかった。〈初出〉山本正成「劔の東大谷」『立教大学山岳部報』7 号 (大成 9 P.192) に「右俣、左俣間の尾根 (中尾根—仮称)」とある。

ちょんらびーク (チョンラピーク)

中尾根上部であって中尾根を下部森林帯と上部岩尾根に分けている。標高約 2720m。下から仰ぐと鋭峰に見えるが実際は肩状。別山尾根側壁の観察に勝れる。初登攀は 1940 年富山高校藤平正夫ら。チョンラピークはナンガ・パルバット山郡 (パキスタン) の山の名。これが当てられたいきさつは不詳。命名は 1940 年、富山高山岳部南彬。〈出典〉藤平正夫「東大谷」『山岳部報』5 P.23「眼前に聳える三角錐状のピークの頂上近くに迫りたり (中略) 此のピークをチョングラピークと南は名附けたり」。なお当時からチョ

ンラピークとチョングラピークが混用されている。

ちょんらふいるん (チョンラフィルン)

中俣の支流 (岳人 39 号 P.27 図)。チョンラピークへのアプローチ。後に富高ルンゼと呼び改まる。フィルン (独) は万年雪。
 □富高ルンゼ □チョンラピーク

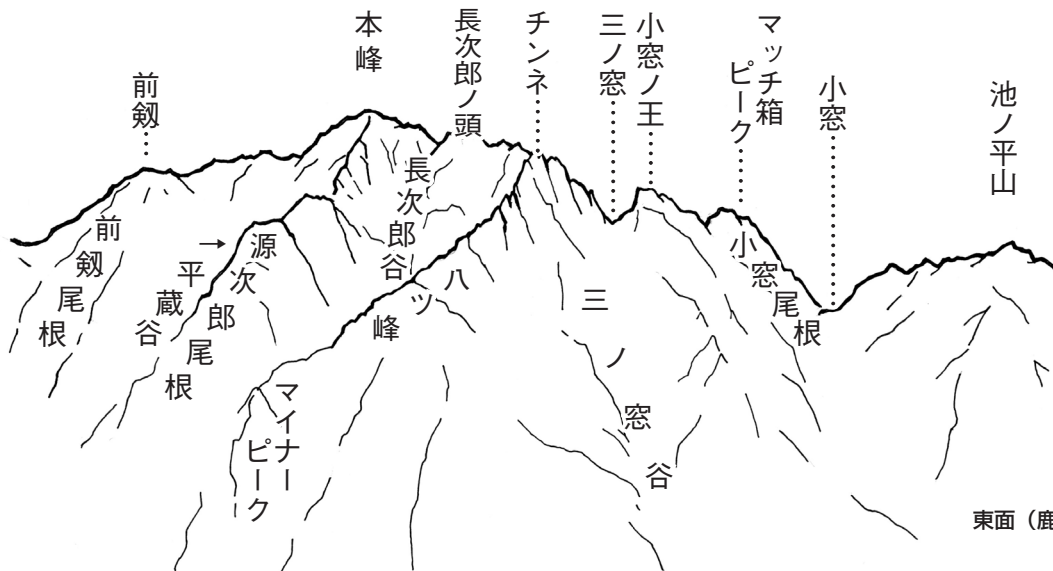
ひだりまた (左俣)

東大谷の開いた手のひらのような分岐の一番左手のもの。早月尾根に突き上げる。東大谷で最初に登られたのがこの谷。1929 (昭 4) 年吉沢一郎 (東京商大 OB) らによる。〈記録〉吉沢一郎著『登山記』(既出)。一時吉沢らをガイドした丸田丈次郎 (上市町蓬沢) から丸田谷ともいわれた。支流に駒草ルンゼ、二本槍ルンゼ、烏帽子岩ルンゼなどがある。

こまくさるんぜ (駒草ルンゼ)

左俣最大の支流。2100m 付近から中尾根最上部に突き上げる。標高差約 800m。複雑な雪渓、不安定な草付き、脆い岩で東大谷最難のルンゼとされる。初登攀は 1951 (昭 26) 年 7 月、広島大学山岳部伏見正博他。〈記録〉『山嶺』53 号 (1951 広島山岳会・年表)。命名は黒百合谷などと同様、富山高校山岳部によって 1940 年頃になされたと思われる。新田次郎の小説『チンネの裁き』では重要な舞台に設定されている。

いっぽんやり (一本槍)



駒草ルンゼ上部、谷中にある岩搭。三本槍、二本槍に合わせて命名されたと思われる。

さんぼんやり (三本槍)

早月尾根の獅子頭から西、東大谷左俣上部へ落ち込む岩稜上に並び立つ岩搭。東大谷左俣のシンボリック的存在。命名は吉沢一郎著『登高記』(既出)の中の次の記述を踏まえている。「(東大谷左俣から山頂辺りを仰いで)丁度中央邊に竝ぶ霞澤の三本槍の様なものの附近には……」。正面ルートの初登攀は1959年5月京都府立大小山貢他(岳人303)。

さんぼんやりるんぜ (三本槍ルンゼ)

駒草ルンゼから分岐して三本槍と二本槍の間に食い込む。駒草ルンゼ左俣ともいわれる。初登攀は1959(昭34)年4月京都府立大小山貢他(大系・年表)。

にほんやり (二本槍)

早月尾根の獅子頭西面側稜上に並び立つ岩搭。三本槍ルンゼを挟んで三本槍と並ぶ。吉沢一郎著『登高記』(既出)では「二本爪」としているが、三本槍、一本槍に合わせて二本槍としたのであろう。正面ルートの初登攀は1963年5月京都府立大小山貢他(大系・年表)。

にほんやりるんぜ (二本槍ルンゼ)

左俣の支流。駒草ルンゼに並行して中尾根最上部に突き上げる急峻なルンゼ。標高差約600m。二本槍、三本槍正面壁へのアプローチとしても登られる。初登攀は1957(昭32)年8月、九州電電山岳部高木律生他。

えぼしいわるんぜ (烏帽子岩ルンゼ)

左俣の支流。早月尾根の王冠に突き上げる脆く短いルンゼ。初登攀は1955(昭30)年7月、名古屋山岳会高田光政他(同会会報90-1957)。

ひだりおね (左尾根)

流域の北西端を限る尾根。上半は毛勝谷との分水嶺。出会い付近から早月尾根2600mに達する。流域の偵察に勝れる。

ひがしせんにんだん (東仙人谷)

白萩川の一源流。白萩山～白ハゲの南西面を流域とする。黒部仙人谷への経路とされたことから

この名。対照地名として西仙人谷がある。

ひしのたん (菱ノ谷) →ハッ峰

ひのきだん (檜谷)

立山川の源流の一つ。支流の白ウラ谷とともに剣御前西面を形成する。1963年、大阪府立大米津英司他による遡行記録がある(『THAKTO』5-既出)。

ふこういわや (富高岩屋)

池ノ谷中間部の標高約1460m、白萩川から小窓尾根を乗り越して谷底に降りついた地点の対岸(左岸)にある。収容は3～4人までとされる。利用者は少ない。

ふこうるんぜ (富高ルンゼ) →東大谷

ふたまた (二俣)

谷の右俣、左俣の合流点。東大谷、池ノ谷とも同じ。長次郎谷、毛勝谷でも使われている。剣沢の場合は「二股」と書いている。☑東大谷、池ノ谷

ふたまた (二股)

剣沢の本流(南股)と北股の合流点。標高約1580m。左岸に近藤岩がある。☑近藤岩

ぶなくらだん (ブナクラ谷)

白萩川の支流。源頭に赤谷山、猫又山をいただく。両者の鞍部がブナクラ峠。ここを中継点としてかつては小黒部谷温泉、仙人谷温泉などへの経路とされた。現在は赤谷山、猫又山などへの足がかりとされる。支流に大ブナクラ谷、小ブナクラ谷、戸倉谷、赤谷などがある。

ぶんぞうおね (文蔵尾根)

東大谷中尾根の別称。☑東大谷中尾根

へいぞういわ (平蔵岩)

平蔵谷が剣沢に落ち合う地点の、平蔵谷からして右岸にある大岩。ドント岩^{※注}(岳人27図)、ほかいくつかの呼び名がある。☑平蔵谷

※注 藤平正夫(既出)が佐伯平蔵に岩の名をただして得た答。「ドント」はかつてガイドした客(外人、伝不詳)の名とか。

へいぞうだん (平蔵谷)

剣沢の支流。剣岳南東面に突き上げる。長次郎谷と並び、通年雪に覆われ、「岩と雪の殿堂」と言われる剣岳の性格形成に役立っている。芦峯寺(立山町)。宇治長次郎と並ぶ名ガイドとされた佐伯平蔵を記念し1913(大2)年、近藤茂吉(既

出、近代における3番目の登頂者)の発案によって命名された。平蔵がこの谷の初踏破者という意味ではない。派生的地名に平蔵岩、平蔵のコル、平蔵ノ頭などがある。

へいぞうのこる(平蔵ノコル)→別山尾根

へいぞうのずこ(平蔵ノ頭)→別山尾根

へいぞうのひなんごや(平蔵の避難小屋)→別山尾根

べっさん(別山)

立山三山の一つ。劔岳頂上の南約3.5kmにあり、劔岳の絶好の観望地とされる。標高約2880m。頂上に硯ヶ池があり、明治大正期、劔岳登山の根拠地(テントサイト)とされた。派生的名称に別山沢、別山尾根、別山平、別山乗越などがある。山名は大汝山などと同様、白山に倣ったもの。

☐硯ヶ池

べっさんいわば(別山岩場)

別山北峰(2880m峰)の北西面に展開する岩場。小規模ながら難易さまざまなルートがとられる。劔沢の別山平のキャンプ場から30分で取り付かれるのも便利。トレーニング場として活用されるほか、技術講習や救助訓練、映画の撮影など、劔岳の代替的岩場として便利に使われる。〈資料〉『とやま山ガイド』(シー・エー・ピー1996)。

べっさんおね(別山尾根)

本峰の南尾根(別山は本峰の真南になる)。今日この往復が劔岳登山の最も一般的なコースとされる。別山乗越、あるいは劔沢小屋、劔山荘などから往復約6~7時間。スリリングな鎖場が多く、劔岳らしいコース。シーズンの最盛期は混雑による渋滞、人為的落石の問題も生じている。山頂に向かって右手が劔沢、左手が東大谷。すなわち黒部川と早月川分水嶺(=立山連峰の主脈=立山町と上市町の境界)をなす。この性格は、山頂以北は劔岳北方稜線に引き継がれていく。初登攀は1913(大2)年、日本山岳会の小暮理太郎、田部重治、中村清太郎およびガイド宇治長次郎。〈記録〉田部重治著『山と溪谷』(1929第一書房・年表)。

くろゆりのこる(黒百合のコル)

劔岳主稜線上の切れ込みのひとつ。別山尾根の劔御前と一服劔の間の鞍部。標高約2530m。近くにクロユリの群生地があるこ

とからの名か。コル(英=鞍部)。関連する地名に黒百合谷(東大谷)、黒百合尾根(同)がある。東側約0.3kmに「劔山荘」がある。1992(平4)年2月、ここで早大生4人が遭難、うち3名が死亡という惨事が起こった。

いっぶくつるぎ(一服劔)

別山尾根の前劔の手前(南側)約0.5kmにある小ピーク。標高2618m。別山乗越、劔沢別山平などを出て劔岳へ向かうときに、最初の休憩点とされることからこの名。1940年代の終わり、富山高校山岳部員により使われはじめたとされる。珍しくコミカルな名称。

たけぞうのこる(武蔵ノコル)

別山尾根の一服劔と前劔との間の鞍部。標高約2570m。武蔵谷がここからはじまる。

☐武蔵谷

もん(門)

別山尾根上のギャップ。登りの場合を例に言えば、前劔を越えて下り切ったところ。標高約2780m。東大谷の奈落をのぞきこむ。難所ということではない。

はしら(柱)

別山尾根の門の北西側のピーク。東大谷G1の頭。岳人39号P.27の図にあるが、他に使用例を見ない。

へいぞうのずこ(平蔵ノ頭)

別山尾根の前劔と平蔵ノコルの間のピーク。標高約2840m。平蔵谷源頭にあることからこの名。

へいぞうのこる(平蔵ノコル)

別山尾根上、平蔵ノ頭と本峰との間の鞍部。標高約2830m。冠松次郎は平蔵ノ窓としている(劔岳)。かつて平蔵の避難小屋があったが、現在は廃止。

へいぞうのひなんごや(平蔵の避難小屋)

劔岳の直下、別山尾根の平蔵ノコル(標高約2840m)にあった。1942(昭17)年内山数雄(富山高校教授)の進言により創建、晩年の平蔵が、その死後は源次郎が小屋を守ったという歴史があるが、現在は廃絶、跡形もない。注意。

かにのたてばい(蟹のタテ這い)

別山尾根登山コース上の難所。平蔵ノコルから山頂へ向かう際の最初の50mほどの鎖場。別山尾根コース中最もスリリングな箇所。昭和三〇年代に蟹の横這いの混雑緩和のため山頂ドームへの登り専用コースが開設されたのに伴い命名された。「蟹の横這い」をもじった。

かにのよこばい (蟹の横這い)

別山尾根登山コース上の有名な難所。平蔵のコルと山頂の間にある数メートルの鎖場。上下でなく水平に移動するところからこの名。同タテ這いルートの開設以後は下り専用の一方通行で使われる。大正期からの名称。〈資料〉青木勝「1925～1926年の立山、劔岳冬季登山」-『登高行』7年(大成8)に1926(大15)年の使用例あり。

べっさんきただに (別山北谷)

劔沢(南股)の源流部の別山平あたりに対する大正期の呼称。☐劔沢 ☐別山平

べっさんざわ (別山沢)

劔沢(南股)の支流。真砂沢出合いより約0.5km上流から分かれ別山の北峰(2880m)へ突き上げている。

べっさんだいら (別山平)

劔沢(南股)源流のカールの底をいう。標高約2450～2550m。劔岳最古の劔沢小屋がある。同小屋は1930(昭5)年1月大雪崩で壊滅、宿泊中の登山者、ガイド6名が犠牲になった。旧小屋跡にこの慰霊塔「六字塚」がある。ほかに山岳警備隊の詰所や野営場の管理事務所、文部科学省登山研修所の前進基地などがある。別山の下という意味。初期には別名として三田平とも呼ばれた。

べっさんのっこし (別山乗越)

雷鳥沢(坂)を登りつめた鞍部。劔岳の大観を仰ぐ。立山三山から大日岳への縦走コースと劔岳への登山コースが合する交通の要衝。劔御前小屋がある。冠松次郎の『劔岳』(既出)ではここを劔沢乗越としている。戦前の文献でこれに倣ったものは多い。隠語的には単にのっこしとも古くからいわれた。☐劔御前小屋

べんけいいわ (弁慶岩)

白萩川上流の谷底にあった大岩。池ノ谷出合と

西仙人谷出合の中間点あたりとされる。大正～昭和前期の記録・ガイドにしばしば出てくるが現在は相当するものが見当たらない^{※注}。流失、あるいは土石に埋没したと思われる。弁慶との関わりはないらしい。〈参考〉小笠原勇八著『立山・劔岳』(既出)。

※注 国元惣一郎「秋の白萩川を尋ねる」(『山とスキー』5所収(1958日産化学山岳スキー班)に出てくるのが最後の記述か。これには「(雷岩あたりから)三十分もゆくと辨慶岩がある。高さ二十米、幅三十米もあろうかと思われる巨石で谷の真中にどっかりと坐りこんで…」と位置、スケールを具体的に述べているのが貴重である。

ぼうし (帽子)

山頂の北東側約0.1kmにある雪田。8月中に消える。氷河期山頂を覆っていた氷冠の名残り。ここからの雪解け水に削られた深いルンゼが本峰北壁をAバットレスとBバットレスに分けている。名命は北東面から見た形からであろう。☐本峰北壁

ぼうずおね (坊主尾根)

北仙人尾根の別名。→北仙人尾根

ぼうずやま (坊主山) →北仙人山

ほんぼう (本峰)

劔岳頂上。前劔、平蔵ノ頭、長次郎ノ頭などの周辺のピークに対して頂上ドームを特化するための便宜的呼び名。

ほんぼうせいほくばつとれす (本峰西北バットレス)

本峰の西北面、池ノ谷右俣源流にひろがる岩場。本峰バットレスともいわれる。北稜(左稜)・中央稜・南稜(右稜)の主たる三本の岩稜からなる。初登攀は1935年立教大学浜野正男他(年譜5)。登攀は早月尾根上部からトラバースして、または長次郎ノコルから下降して取り付く。このことから長次郎のコルへ突き上げる池ノ谷右俣源流の谷をバットレス沢と呼んだ。

ほんぼうなんぺき (本峰南壁)

本峰ドーム南面の岩稜。平蔵谷源頭の上にひろがる。最も高い位置にある岩場というのが特色。下から見て右からA1～A4の4本の岩稜からなる。内、A1・A2は劔岳でのクライミングの基本ルートとされる。平蔵のコルから平蔵谷の雪渓を下降して取り付く。「A」はアレート(仏=瘠せた岩稜)から。本峰南稜・南面バットレスなどと

もいわれる。初登攀は1948年富山高校藤平彬文他（岳人13）。

ほんぼうほくへき（本峰北壁）

本峰の東面（だから正確には「東壁、というべきか）の、長次郎谷源流にひろがる氷蝕岩稜群。本峰北東面にある帽子と呼ばれる残雪から流れ落ちるルンゼを基準にAバットレス（向かって右側）とBバットレス（同左側）とに分けている。後者はL1～L6と、6本のアレートを連ねている。南壁同様にいずれもクライミングのトレーニングの好対象。しかし対岸の八ッ峰のVI峰フェース群

等に比べて極端に人気がない。富山高等学校（現富山大）によりに本峰バットレスとして紹介されたのは1940年頃だが、八ッ峰のVI峰フェース群がしきりに登られた1930年代、各大学・高校山岳部によって同じように登られていた^{※注}。略号「L」の意味不詳。

※注 山崎安治「劔岳池ノ谷尾根」（大成9）の中に次のようにある。「（1939年の夏山合宿中のこととして）劔頂上から長次郎谷側へ張り出しているバットレスなどの岩場へ連日出かけてクライムを楽しんだ」。

ま 行

まいなーぴーく（マイナーピーク） →八ッ峰

まえつぎ（前劔） →前劔（ぜんけん）

まごつぎ（孫劔） →東大谷

まさごさわ（真砂沢）

劔沢（南股）の支流。真砂岳、別山を源流とし北東に流れ劔沢の真砂平へ注ぐ。谷自体はほとんど登降されない。合流点に真砂沢ロッジがあり、キャンプ場は八ッ峰や源次郎尾根登攀のベースとされる。

まさごだいら（真砂平）

劔沢の真砂沢出合左岸の段丘状の広がり。標高1760m。八ッ峰の裾にあたる。水、薪が豊富という生活環境のよさから、早くから劔岳登山の根拠地とされた。単にマサゴあるいはマサゴザワと略す場合が多い。昭和の初年第四高校（現金沢大、以下同じ）生のあいだで四高平と呼ばれたが広まらなかった（大成8）。

まさごさわろっじ（真砂沢ロッジ）

位置、劔沢の真砂沢出合。標高1750m。黒部湖からハシゴ谷乗越経由、または樺平から仙人谷経由のコースの入下山の中継点。八ッ峰・長次郎谷コースによる劔岳登頂のベースとされる。キャンプ可。

まさごのおおだき（真砂ノ大滝）

劔沢（南股）に懸かる滝。長次郎谷出合いの0.2kmほど下流、雪溪の狭窄部にある。高さは約20m。7月中は主として雪溪の下に隠れている。左岸の登山道を行くのが無難。別名南無の滝。

1933（昭8）年7月梅雨明け豪雨の中、大阪商大生三名がこのあたりで遭難、それにちなむ呼称か。またその後1955（昭30）年富山大の石井逸太郎教授の転落遭難もあった〈資料〉藤平彬文「なむの滝」『峰友』2所収（1964富山峰友山岳会）。

まつおだいら（松尾平） →早月尾根

まるやま（丸山） →早月尾根

まっちばこ（の）ピーク（マッチ箱（の）ピーク） →小窓尾根

みただいら（三田平）

劔沢源流の別山平の別名。大正期初頭、慶応大関係者から広まる。☐別山平

みなみせんになやま（南仙人山）

劔沢左岸山稜（ガンドウ尾根）上のピーク。仙人山の東約1.5kmにある。仙人湯の真南に当たる。標高2173.1m。三等三角点がおかれる。南に劔沢を挟んで黒部別山北峰と向き合う。☐ガンドウ尾根

みなみまた（南股）

劔沢の本流。命名は吉沢庄作か。同氏の「黒部方面より劔岳を経て立山に至る記」-『山岳』23年1号に初出（大成7）。

むろどう（室堂）

立山禅定（立山信仰登山）の登山基地。日本最古の山小屋とされる。標高約2450m。劔岳のアタック基地としても初期（明治末～昭和前期）特に積雪期登攀において重要な役割を果たした。

もん（門） →劔尾根 →別山尾根

や 行

やつみね (ハッ峰)

劔岳の主稜線、山頂の北約 0.6km のピーク (ハッ峰の頭) から南東へ指し伸ばされた尾根。別山乗越や仙人池などから眺めた時の、鋭鋒を連ねた山容形成に決定的な役割を果たす。ただし富山平野からは全く見えない。主稜線上の岩峰は二〇ほど数えることができるが、名称に合わせて I ~ VIII 峰を特定、さらに VIII 峰の上にハッ峰ノ頭を、I 峰の裾にマイナーピークをおく。初登攀は 1923 (大 12) 年、早稲田大の小笠原勇八らが V 峰・VI 峰を登攀、引き続いて同年、学習院の岡部長量、芦畠寺のガイド佐伯宗作が長次郎谷から I 峰の南稜 (一稜) 上部を経て I 峰に達し全峰を縦走した。主稜線、側壁、側稜を含め劔岳の岩場の代表的登攀コースとされる。〈初出〉木暮理太郎「黒部川奥の山旅 (中編)」(『山岳』11 年 2 号・大成 7)「東南に向てハッ峰と称する山稜を派出せるものなり」とある。命名は宇治長次郎とされる。〈出典〉渡辺漸「劔岳新登路とハッ峰」-『山岳』21 年 1 号^{※注} (大成 8)。

※注 この記事に添付の解説図 (1925 渡辺作) がその後のハッ峰各峰同定の基本となった。

主稜線・長次郎谷側

やつみねいっぽう (ハッ峰 I 峰)

ハッ峰の頂稜東南端のピーク。東面の頂点。標高 2656m。通常ハッ峰登攀というと、ここから II 峰・III 峰・と峰順にしたがいハッ峰ノ頭まで縦走することをいう。初登攀は 1923 (大 12) 年岡部長量 (学習院) ガイド佐伯宗作 (大成 8・年表)。

” にほう (同 II 峰)

I 峰の北西約 0.2km にある。標高約 2640m。南面 (長次郎谷側) フェースの初登攀は 1925 (大 14) 年三高今西錦司他 (大成 8)。

” さんぼう (同 III 峰)

II 峰の西に並ぶ。標高約 2650m。南面 (長次郎谷側) フェースの初登攀は 1926 (大 15) 年三高高橋健治他 (大成 8)。

” よんぼう (同 IV 峰)

III 峰に並ぶ。標高約 2670m。V 峰への縦走

の際は三ノ窓側の雪渓への懸垂下降がある。南面 (長次郎谷側) フェースの初登攀は 1926 (大 15) 年三高高橋健治他 (大成 8・年表)。

” ごほう (同 V 峰)

北西側が 5.6 のコルへ切れ落ちている。ハッ峰下半というところまで。標高約 2710m。北西端に鋭い針峰を突き立てている。初登攀は 1923 (大 12) 年早稲田大の船田三郎他。長次郎谷から 5.6 のコル経由、頂上に立つ。南面 (長次郎谷側) フェースの初登攀は 1926 (大 15) 年三高高橋健治他 (大成 8・年表)。

” ろっぽう (同 VI 峰)

南北に連なる 5 つの岩峰からなる。それぞれの南面のフェース (正面壁) は 6 峰のフェースと呼ばれ劔岳の代表的な岩場として親しまれている。手前 (東側) から A ~ E フェースの名で呼ばれ、順次高さを増し E フェースの頭が VI 峰の頂上。標高約 2800m。ハッ峰のうち最初に登られた峰。1923 (大 12) 年、早稲田大の船田三郎他。長次郎谷から 5.6 のコル経由 (大成 8・年表)。

ろっぽうえーふえーず (A フェース)

VI 峰フェース群の一番前面に突き立つ。主な登攀ルートに中央大ルート (詳細不詳)、魚津高ルート (1951 魚津高) がある (大系 5)。

” びーふえーず (B フェース)

A フェースの陰になって目立たず人気がない。主な登攀ルートとして開拓順に京都大ルート (1952 京都大)、京都府立大ルート (1962 京都府立大) がある (大系 5)。

” しゃーふえーず (C フェース)

難易度もほどよく、乾いた明るい壁で登攀は快適。最も人気が高い。主な登攀ルートに開拓順に RCC ルート (1926 第三高校)^{※注}、慶応ルート (1935 慶応大) がある。後者は劔稜会ルートともよばれてきた (大系 5)。

※注 1928 年 RCC が登ったのでこう言われているが、その 2 年前三高パーティによって初登攀され

ている。したがって三高ルートとするのがふさわしい(大成8)

ㄎ **でいふえーす (D フェース)**

傾斜が強く難易度が最も高く充実した登攀が味わえ人気が高い。主な登攀ルートに開拓順に富山大ルート(1952 富山大)、ベルニナルート(1953 ベルニナ山岳会)、久留米大ルート(1955 久留米大)がある(大系5)。

ㄎ **いふえーす (E フェース)**

Ⅵ峰の頂上に突き上げる。劔稜会ルート(1950 劔稜会)がある(大成8)。

やつみねななほう (ハッ峰Ⅶ峰)

Ⅶ峰に並ぶ。標高約2820m。北東面(三ノ窓谷側)に稜線を避けるエスケープコースがある。南面(長次郎谷側)フェースの初登攀は1926(大15)年三高高橋健治他(大成8)。

やつみねはっぽう (ハッ峰Ⅷ峰)

Ⅶ峰に並ぶ。標高約2850m。

やつみのずこ (ハッ峰ノ頭)

ハッ峰西端のピーク。ハッ峰登攀の終了点。標高約2880m。北にチンネが並ぶ。西が池ノ谷乗越。一時期三ノ窓の頭ともされた。

いちにかんるんぜ (1.2 間ルンゼ)

ハッ峰の南面側壁に食い込むルンゼ。長次郎谷からハッ峰Ⅰ・Ⅱ峰の鞍部に突き上げる。ハッ峰下半に取り付く時の通常のコース。ここからハッ峰に最初に取り付いたのは1924(大13)年馬場忠三郎(明治大)とガイド佐伯宗作(年表)。

にさんかんるんぜ (2.3 間ルンゼ)

前項の1.2 間ルンゼから分かれてⅡ峰・Ⅲ峰の鞍部に突き上げる。これもハッ峰下半の取り付きコースとされる。

ごろくのこる (5.6 のコル)

V峰とⅥ峰の間のコル。ハッ峰中最も大きなギャップ。ここで下半、上半に分けている。長次郎谷からは雪渓とガレで登降とも容易。1923(大12)年早稲田大の船田三郎他がハッ峰に初めて挑戦したときはここを足がかりにⅥ峰・V峰に登った(大成8・年表)。なおこの名が確立する過程で5.6 キレット、大キレットなどいくつかの名でよばれた。

東面 (劔沢側)

※ ハッ峰Ⅰ峰を頂点、劔沢本流を底辺とする三角形をなす地域。Ⅰ峰から尾根が扇の骨のように東へ伸び、それらの間へ劔沢の支流がくい込む。尾根は上流側から一稜～四稜、その間の沢は稜に対応するように一ノ沢～四ノ沢と呼ばれている。これらの呼び名は大阪大学山岳部発表の「劔岳ハッ峰一峰東面」(『関西学生山岳連盟報告』11号・大成10)を基本としている。ただしその後サンナビキ同人和田城志(後出)によって一部修正された。稜は積雪期、沢は無雪期の、ハッ峰への登路とされる。この方面の特筆すべき資料として和田城志「劔岳ハッ峰巖冬期登攀の研究」(上・下-『岩と雪』140・141所収)がある。

まいなーびーく (マイナーピーク)

ハッ峰Ⅰ峰の東面にある岩峰の名。Ⅰ峰から東へ派生した二稜中間に突き立つ。特異な山容は劔沢上部からも目立っている。標高2341m。北東面三ノ沢右岸に登攀ルート東面スラブ(大系5)がある。命名は高橋健治(第三高校)。当初はⅠ峰の東面一帯の小ピークを総合して与えられた名称だったが、たちまちにして今日それとされているピークに特化した。〈資料〉高橋健治「劔岳東面」(『三高部報』6号・大成8)^{※注1}。初登攀は1926(大15)年大阪高等工業のパーティか^{※注2}。

※注1 上記文献に「第一峰より下の Mainor peaks (編者訳「小峰群」と名付ける所に面白いルートもあるが、まだ歩いてみたことがない」とある。また、第四高校の「劔沢ベースキャンプ日誌」(同校部報『ベルグハイル』5号・大成8)には上記の前提をふまえつつ本命(現マイナーピーク)に烏帽子岩、ほか周辺のピークにピラミッドピーク、独帽岩、尖岩などの名称をあたえている。しかしどれもその後継承されなかった。

※注2 高橋健治の「ハッ峰、源次郎尾根」(『三高部報』5号・大成8)には「大阪高工のパーティに会ったら我等のマイナスピーク(ママ)と名付くものの中の一つをアッセントしたと話していた」(1926(大15)年のこと)とある。

いちのさわ (一ノ沢)

劔沢の支流。長次郎谷出合いの下流約

0.2km 地点からハッ峰一稜、二稜間をその接合点に突き上げる。

にのさわ (二ノ沢)

劔沢の支流。真砂平らのやや上で本流と分かれ二稜の下部を右稜と左稜に分ける。1929年四高踏破? (大成8)。

さんのさわ (三ノ沢)

劔沢の支流。真砂平の下流約0.3km下流からほぼ一直線にハッ峰I峰に突き上げる。ハッ峰やマイナーピークのアプローチとされる。1929年第四高校パーティが初登攀(大成8)。

よんのさわ (四ノ沢)

三ノ沢に並ぶ劔沢の支流。二股の上流約1kmで分岐これもI峰直前で四稜に出る1929年第四高校パーティが初登攀(大成8・年表)。

いちりょう (一稜)

I峰頂上から南へ伸びる尾根。長次郎谷に沿いつつその出合いに達する。途中(標高約2440m付近)で二稜を分岐させる。初登攀は1932(昭7年)東京大の小川登喜男・単独・(年表)。

にりょう (二稜)

標高約2440m付近で一稜から分岐。マイナーピークはこの稜にある。同ピークのやや下で二ノ沢をはさんで右稜、左稜に分かれる。第四高校の『ベルグハイル』(既出)ではこれを中央稜としている。ピークの初登攀は大正期に遡るが、稜の完登は1963年、関西登高会による(年表)。

さんりょう (三稜)

三ノ沢と四ノ沢に分ける尾根。一峰から南東へ延び劔沢左岸に達する。初登攀は1961年大阪大学山岳部パーティによる(年表)。その後黒部別山経由でハッ峰に取り付く際のノーマルルートのようになった。昭和の初年第四高校ではこれを馬ノ背稜と呼んだが(『ベルグハイル』-既出)継承されなかった。

よんりょう (四稜)

一峰から東へ延び劔沢二股に達する。ハッ峰の裾を東面と北面に分けている。標高差

1000mを超える複雑で長い尾根。中間点に特徴的なピーク(標高2217m)があって基準的ポイントとなっている。今日は無名岩峰とされているが第四高校(『ベルグハイル』既出)で釣鐘岩としているのはこれと思われる。

北面 (三ノ窓谷側)

※ 仙人池や池ノ平から仰ぐと恐竜の背のように岩峰を並べているのがハッ峰。ここに言う北面はその横っ腹。幾万年の雨・氷雪がそこに鋭い溝を刻み、また溝と溝の間の尾根を研ぎすました。溝は東側(下流)から順に口ノ谷、壁ノ谷、滝ノ谷、袖ノ谷、函ノ谷、菱ノ谷と命名。これらの谷はすべて三ノ窓谷に注ぐ。またこれらの間の尾根は谷の名に即して、滝ノ稜、袖ノ稜、函ノ稜、菱ノ稜などと命名。谷名は主として魚津岳友会が、稜の命名は和田城志(既出)が行った。各谷(ルンゼ)は無雪期、稜は積雪期の好登攀対象とされる。

くちのたん (口ノ谷)

二股から約0.5km上流で三ノ窓谷に注ぐ。四稜の無名岩峰の裾あたりで消える。三ノ窓谷へ入って最初に合流することからこの名。過去の記録は見ない。

かべのたん (壁ノ谷)

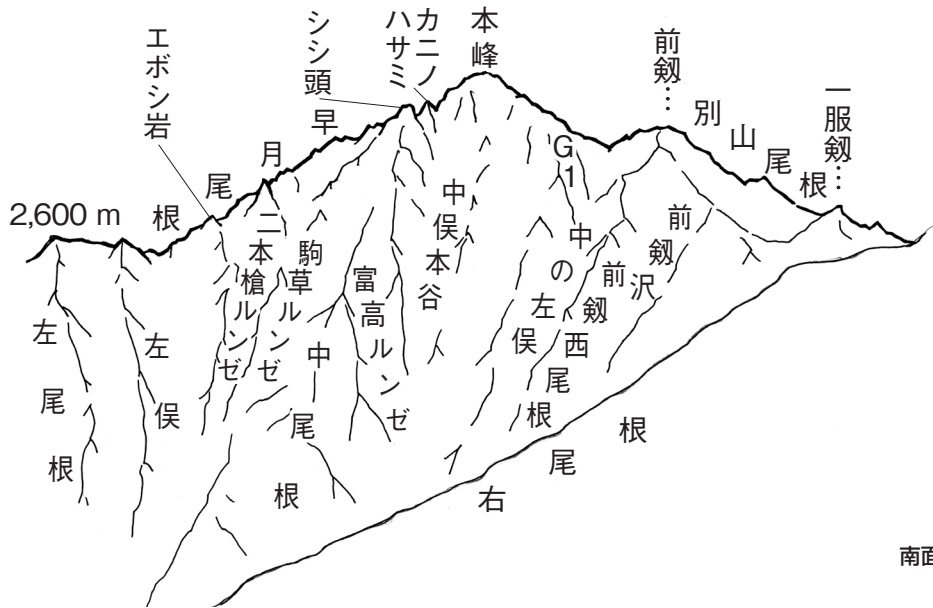
二股から約0.7km上流で三ノ窓谷に注ぐ。中間部が絶壁帯となとなっていることからの名。I峰直下の四稜に突き上げる^{※注}。初登攀は1963年関西学院大松野武他(大系)。※注 このように四稜は東面と北面に分ける位置にある。またハッ峰の真の末端でもある。このことを表現する名称でありたいところ。

たきのたん (滝ノ谷)

二股から約1.5km。下端が雪崩に磨かれたスラブでそこにさわやかな滝を懸ける。そのスラブ帯が充実した登攀を提供する。ルートは右岸(左壁)。1977年魚津岳友会の記録がある(岳人400・年表)。

そでのたん (袖ノ谷)

滝ノ谷の横へこれに沿うように注ぐ。中間部はやはり豪快な壁状ルンゼ。登攀は難しい。途中で二つに分かれ並行するようにしてI・II峰の間へ突き上げる。1979年魚津岳友会の記録がある(岳人400)。



南面（奥大日岳から）

はこのたん（函ノ谷）

深い割れ谷。途中左へ A ルンゼ、B ルンゼ、C ルンゼを分ける。A は I・II 峰間の鞍部へ、B は II・III 峰間、C は III・IV 峰間、本谷は IV・V 峰間の鞍部へ突き上げる。C ルンゼおよび本谷は、1978 年魚津岳友会の記録がある（岳人 400）。

ひしのたん（菱ノ谷）

谷の右岸に怪奇な絶壁（菱）を連ねていることから名。5.6 のコルへ突き上げる。三ノ窓谷と長次郎谷を繋ぐ経路とされる。ただし季節の進行につれてクレヴァスが空き通過が困難になる。1930（昭 5）年黒田正夫、初子夫妻（日本山岳会）が八ッ峰に登った時のコース（大成 9）はここと思われる^{※注}。
 ※注 年表では函ノ谷としている（P.50）が、比較的容易な菱ノ谷を避けて函ノ谷を登ったとは考えにくい。

たきのりょう（滝ノ稜）

壁ノ谷と滝ノ谷を隔てる尾根。壁ノ谷出合い左岸にはじまり、四稜最上部へ出る。中間部、標高約 2270m に奇峰ドミノ岩（命名和田城志）がある。1983 年 3 月和田城志他が初トレース（岩と雪 141・年表）。

そでのりょう（袖ノ稜）

袖ノ谷本谷と左俣を分ける極めて急な稜。II 峰に突き上げる。初登攀は 2002 年服部文祥（『サバイバル登山家』2006 みすず書房）。

はこのりょう（函ノ稜）

函ノ谷出合い付近から II 峰へ。1963 年大阪登峰会斎藤裕二他が初登攀。初登攀時は II 峰北稜とされた（岳人 190・年表）。

ひしのりょう（菱ノ稜）

菱ノ谷と函ノ谷を分ける尾根。1975 年 5 月魚津岳友会の荒木鷹志他が登攀 V 峰に達した（岳人 400）。

いちのひし～さんのひし（一ノ菱～三ノ菱）

菱ノ稜上に三つのピークがあり、どれも北側は垂直の絶壁となっている。八ッ峰 V 峰の頂上を一ノ菱とし、以下二ノ菱、三ノ菱と命名。一ノ菱は V 峰ニードルと呼ばれ 1960 年成城大学パーティによって初登攀された（年譜 7・年表）。三ノ菱は 1975 年魚津岳友会の荒木鷹志他が初登攀した（岳人 400・年表）。

くれおばとらに一どる（クレオパトラニードル）

八ッ峰 VIII 峰北面、チンネとの間にある針峰。その特異な形態は池ノ平や仙人池などからも見えるので一般の登山者にも知られている。八ッ峰上半縦走の途次に登られる。ルートは西側から。初登攀は 1924（大 13）年明治大学の馬場忠三郎、ガイド佐伯宗作。この段階では無名峰。見出しのように命名されるのは翌 1925（大 14）年。三高高橋健治らによって。ローマのオベリスク（四角い尖塔）クレオパトラニードルに似ていることから^{※注}

¹。高橋らがこれを登攀（第2登）するのはさらに翌年、1926年（大成8）^{※注2}。今日はほとんど単にニードルで通っている。

※注1 命名の発案者として田中喜左衛門が関わる。田中は大正期に活躍した京都の登山家。高橋健治「劔岳の東面」（『山高山岳部報告』6号・大成8）には「元老田中喜左衛門氏に写真を見せると『よう、これはクレオパトラニードルそっくりだ』と。早速

このニードルはハッ峰クレオパトラと名付けようということになった」。

※注2 高橋健治「劔岳の東面」（既出）には「三ノ窓チンネ（尖閣 Zinne）の更に左手に相似形の尖峰がある。これをハッ峰クレオパトラ Cleopatra と命名する。いずれも1927年夏我々グループによって初登攀されたものだ。」とあるが、後段は正しくない。

ら 行

らいちょうざわ（雷鳥沢）

称名川上流の浄土沢から別山乗越に向かって突き上げている凹み。その中、あるいは左岸に、立山三山巡りの下山道が通っている。これが室堂を起点とした時の劔岳の入山路とされる。水流もなく、いわゆる「沢」というほどの実体はない。てっぺんの鞍部が別山乗越。雷鳥坂とも。観光的

な名称だが、古く（大正期）から使われている。命名のいわれ不詳。

ろうそくいわ（ローソク岩）

劔岳北方稜線上にある岩搭。大窓の頭と池ノ平山との間の鞍部に突き立つようにしてある。標高約2500m。通過するときは付け根の小黑部谷側（東側）を巻く。

わ 行

わだ（和田）

常願寺川左岸（芦峯寺の対岸）にある村落。富山県上新川郡大山町和田（現富山市）。本辞典で

取り扱う範囲の圏外だが、「わ行」に何も無いのもさびしいのでおまけ。名ガイド宇治長次郎の生地。

■ 佐伯邦夫プロフィール

1937年生まれ。魚津高校山岳部で高瀬具康の薫陶を受け、高須茂のあとを慕い大東文化大学に学ぶ。両先輩で著した『劔岳 登攀ルート解説』（1956 築地書館）の、その後の数次にわたる増補改訂作業を引き継ぐ。

劔岳では1956年毛勝谷を登攀。また魚津岳友会を率いて小窓尾根・ハッ峰の北面の開拓などにあたる。著書に『劔岳をどう登るか』（1976 北国出版社）他。